

## 第3節 史跡の概要

### 1. 史跡の概要—下総国分寺跡 附北下瓦窯跡とは

下総国分寺は、天平13年（741）聖武天皇によって発せられた「国分寺建立の詔」により、国家の一大事業として全国に建立された国分僧寺の一つで、「金光明四天王護国之寺」が正式名であった。下総国分寺跡の主要建物は現国分寺とほぼ同じ場所にあり、現在までその法灯が伝えられている。

下総国分寺跡では、昭和40～41年の発掘調査で金堂・塔・講堂などの主要建物が発見され、法隆寺（奈良県）と同じ建物の配置（法隆寺式伽藍配置）であることが判明した。それらの建物は赤く塗られた柱が建てられ、屋根には瓦が葺かれた。その姿は国家の威信を示す建物群であり、特に60mを越える高さの七重塔は「国の華」と称された。

その後の発掘調査により、下総国分寺跡の範囲が東西350m程、南北400m程になることが分かり、僧の生活の場や寺院の事務に係る施設や造営や営繕などの付属施設、さらにはそれに係った人々の住まいなどが発見された。こうした発見から下総国分寺跡では、寺の空間構成や経過、消長などの実態を知ることができる。

下総国分寺の主要建物の屋根に葺かれた瓦には、「宝相華文」と呼ばれる瓦の文様としては特殊な文様が軒先を飾る瓦の装飾に使用され、下総国分寺の特徴となっている。この瓦は寺域の東側に位置する北下瓦窯跡やその周辺の工房跡で生産された瓦で、その姿は生産地と消費地の様子を今に伝えるものである。

### 2. 発掘調査の経緯

下総国分寺跡では、昭和7年（1932）の発掘調査により国分寺と国分尼寺の位置が確認されて以来、今に至るまで発掘調査が続き、90地点以上の調査が行われている。発掘調査は開発の事前調査として実施されることが多く、今後も断続的に行われることが予想される。同様に、下総国分尼寺跡、国分遺跡、北下遺跡などの関連する遺跡でも開発等に伴う発掘調査が行われ、その調査成果が蓄積されつつある。

なお、現在下総国分寺の寺域内と考えられる範囲では、寺域が判明する以前に遺跡名が付された国分平川遺跡が所在し、さらに国分遺跡として発掘調査が行われた地点もある。

#### 主な発掘調査

1932年 平野元三郎氏、滝口宏氏により下総国分寺跡と下総国分尼寺跡の位置が確定。

1966年 市川市史編纂事業に係る調査により主要建物である金堂・塔・講堂の基壇、さらに台地の東側斜面で瓦窯跡が確認される。

1975年 寺域追求のための発掘調査により、金堂跡から北に約93mの位置で大溝を発見し、北辺と想定（後に、大衆院などを区画する溝と判明）。

1976年～ 下総国分寺跡周辺で個人住宅建設や農地造成等に伴う発掘調査が実施される。

1982年 講堂跡から西に約135mの位置で西側の区画溝が発見される（第13次）。

1985年 個人住宅建設に伴う発掘調査で西側の区画溝の延長部分が確認される（第21次）。

- 1988年 主要伽藍の北方で共同住宅建設に伴う発掘調査が実施され、掘立柱建物群が発見される。主要伽藍との位置関係から何らかの中心建物もしくは重要な施設とみなされた（第20次）。
- 1989年～1993年度 下総国分寺跡の寺院地等の確認調査を実施。寺院地北辺・西辺・北西隅の区画溝、宮繕施設、主要伽藍北方の施設、塔の中軸線延長と北辺溝との交点で架橋遺構などを発見。
- 2001年 主要伽藍の北東で共同住宅建設に伴う発掘調査が実施され、第20次で見つかった掘立柱建物群と同様の建物群が発見される（第55次）。
- 2004年 東京外かく環状道路の建設に伴い北下遺跡で発掘調査が実施され、瓦窯跡が2基発見される（2010年に追加指定）。
- 2009年 同じく北下遺跡で祭祀遺物（国府域の境界祭祀）が発見される。

### 3. 発掘調査の成果

これまでの発掘調査により、下総国分寺跡では奈良・平安時代の基壇、瓦窯跡、竪穴建物、掘立柱建物、溝などを中心に、中・近世の掘立柱建物や台地整形、地下式坑などが発見されている。竪穴建物は80棟以上、掘立柱建物は50棟以上に及び、下総国分寺が創建される8世紀中頃から11世紀頃までが中心で、特に8世紀後葉以降に増加する傾向が見受けられる。

また、下総国分寺の創建よりも前の遺構は、下総国分寺跡で7世紀～8世紀前葉の竪穴建物が3棟程、国分平川遺跡で古墳時代中期の竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物1棟が確認されているのみで、国分台の台地上は下総国分寺が創建されるまで僅かな建物が散在する状況であったと考えられている。

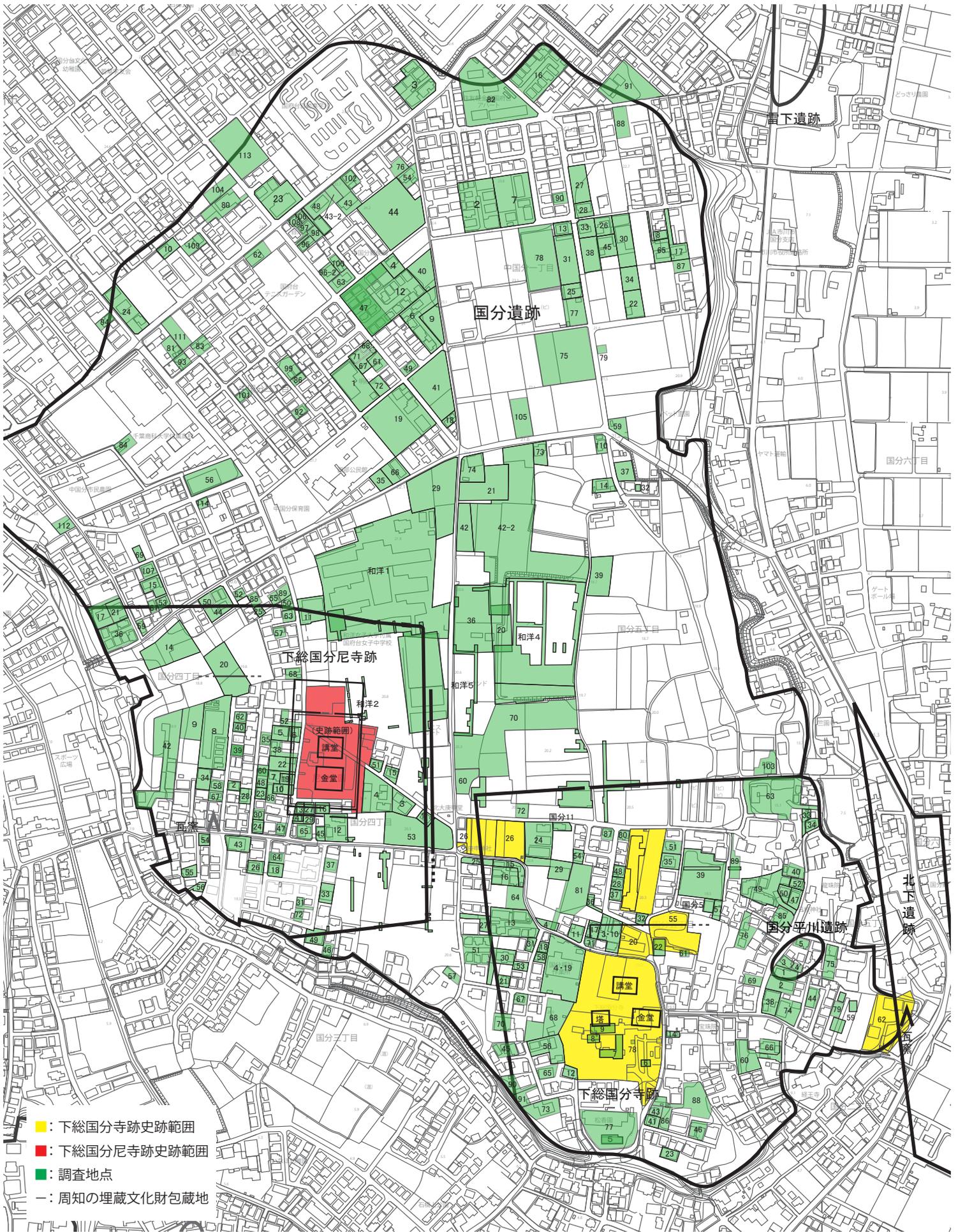
出土した遺物は須恵器や土師器などの土器類と瓦類が多く、他にも金属製品や石製品、鉄生産に関連する遺物などが出土している。墨書土器には国分寺を示すと考えられる「金」・「東寺」、寺の施設に関わる「院」・「講院」・「造寺」、その他にも「国厨」・「□京」・「匠」・「海上□」などの文字が認められる。瓦類では、丸瓦と平瓦の他にものしがわら熨斗瓦やせん塼、「埴」の文字瓦などが出土し、窯跡周辺では失敗して廃棄された瓦なども多く出土している。軒瓦には、宝相華文が創建期に、れんげもん蓮華文とからくさもん唐草文などが補修期に施され、下総国分寺の特徴となっている。

#### (1) 下総国分寺跡の範囲・大きさ

下総国分寺は国分台の台地南東端に立地し、寺域(寺院地)の範囲は北側と西側を溝で区画され、南側と東側は台地の縁辺までと考えられることから、大きさは東西350m程、南北400m程と推測される。標高は主要建物付近で20m程であるが、東に向かって低くなり、金堂の東約50m付近では17m程となり、さらにその東で一段低くなり14m程を測る。北下瓦窯跡の台地上の平場は11～10m程で、低い部分は5m程を測る。

下総国分寺の寺域を区画する溝は断面が逆台形を呈する素掘りの溝で、北辺と西辺を区画している。溝は幅1.6～2.7m、深さ0.6～1.1mで、土層断面や掘削状況などから2回の掘り直し（補修）が認められ、掘り直す度に掘り込みの幅は広がり、その反面深さは浅くなる傾向である。

掘削時期や補修時期などを明確にすることは難しいが、溝と関連する架橋施設が塔の中軸線の延長上に位置することから、寺院の造営の早い段階から計画されていたと考えられている。また、溝を掘り込む土坑から10世紀中葉の土器が出土していることから、10世紀には埋没し寺域を区画する機能が停止していたと考えられている。



第10図 下総国分寺跡周辺の発掘調査位置図 (1/5,000)

表2 下総国分寺跡及び関連遺跡の主な発掘調査(平成30年3月27日現在)

遺跡名	調査地点	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> )	主な遺構	主な遺物	備考	報告書
	1	国分3-1790-1他	-	基壇	奈良・平安時代瓦	金堂・塔・講堂跡	市川市「市川市史」
	3	国分5-1774-3	127	奈良・平安時代竪穴建物1、溝3、土坑10	-		市川市「市川市史」
	4	国分3-1785-1他	245	溝6、土坑5	-		市立市川博物館「昭和49年度市立市川博物館年報」1975
	5	国分3-1482	45	なし	-		報告書未刊行
	6	国分3-1790-1	100	近世門跡1	-		市立市川博物館「昭和50年度市立市川博物館年報」1976
	7	国分3-1790-1	117	なし	奈良・平安時代瓦、中・近世土師質土器	回廊推定地	市川市教育委員会「昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告」1980
	8	国分3-1790-1・2	31	中・近世土坑1	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告」1981
	9	国分3-1790-1・2	12	古墳時代後期竪穴建物1、基壇、中・近世土坑2	奈良・平安時代土師器、瓦	塔跡	市川市教育委員会「昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告」1981
	10	国分5-1774-6	173	奈良・平安時代竪穴建物1、溝2、土坑9	なし	寺域内区画溝	市川市教育委員会「昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告」1982
	11	国分5-1774-6	27	なし	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「昭和57年度埋蔵文化財発掘調査報告」1983
	12	国分3-1845-6	4	なし	なし		市川市教育委員会「昭和57年度埋蔵文化財発掘調査報告」1983
	13	国分3-1782-6	556	古墳時代後期竪穴建物1、奈良・平安時代竪穴建物6、溝1、土坑4	古墳時代後期土師器、奈良・平安須恵器、土師器、鉄貨、鉄製品、円面硯	西辺区画溝	市川市教育委員会「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告」1984
	14	国分2-1794-1	6	なし	なし		市川市教育委員会「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告」1984
	15	国分3-1782-1の一部	89	なし	なし		市川市教育委員会「昭和60年度埋蔵文化財発掘調査報告」1986
	16	国分3-1782-4の一部	300	奈良・平安時代竪穴遺構4、土坑106	奈良・平安時代須恵器、土師器、中・近世陶器		市川市教育委員会「昭和60年度埋蔵文化財発掘調査報告」1986
	17	国分5-1774-28	111	奈良・平安時代溝1	奈良・平安時代土師器、瓦	寺域内区画溝	報告書未刊行
	18	国分3-1785-33	23	奈良・平安時代竪穴遺構2、溝1	縄文土器、奈良・平安時代土師器、瓦		報告書未刊行
	19	国分3-1785-1他	947	奈良・平安時代竪穴建物2、溝1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	20	国分5-1774-1	690	奈良・平安時代竪穴建物2、掘立9、溝5	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、鉄製品	僧坊跡、大衆院跡	報告書未刊行
	21	国分3-1785-3	70	奈良・平安時代竪穴建物1、溝1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦	西辺区画溝	報告書未刊行
	22	国分5-1785-3他	78	土坑3	奈良・平安時代瓦		報告書未刊行
	23	国分2-1840-1	25	溝2	奈良・平安時代土師器、瓦		報告書未刊行
	24	国分5-1780	335	奈良・平安時代竪穴建物3、掘立2、溝1、土坑19	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	25	国分3-1782-1	86	奈良・平安時代溝2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦	西辺区画溝	報告書未刊行
	26	国分5-1780	412	奈良・平安時代竪穴建物4、掘立9、鍛冶工房3	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、土製品、鉄製品		報告書未刊行
	27	国分3-1782-17他	65	奈良・平安時代溝2、土坑1	奈良・平安時代土師器、瓦	西辺区画溝	報告書未刊行
	28	国分5-1778-17	27	ピット3	奈良・平安時代灰軸陶器、瓦		報告書未刊行
	29	国分5-1777	248	中・近世溝2、土坑2	奈良・平安時代須恵器、瓦、中・近世土師質、陶磁器	道路跡	市川市教育委員会「平成4年度市川市内遺跡発掘調査報告」1993
	30	国分3-1785-3	143	奈良・平安時代溝1、近世以降溝8	-	西辺区画溝	報告書未刊行
	31	国分3-1785-20	20	溝1、土坑23	奈良・平安時代土師器、瓦		報告書未刊行
	32	国分5-1778-20	-	竪穴建物2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	33	国分5-1761-4	-	-	-		報告書未刊行
	34	国分5-1761-4	-	-	-		報告書未刊行
	35	国分5-1789-9	-	-	奈良・平安時代須恵器、土師器		報告書未刊行
	36	国分5-1778-21	-	土坑ヵ	奈良・平安時代土師器、瓦		報告書未刊行
	37	国分5-1778-18	16	竪穴建物1、ピット1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	38	国分5-1740-1他	-	-	奈良・平安時代土師器、瓦		報告書未刊行
	39	国分5-1766	249	奈良・平安時代竪穴建物1、溝1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、獣骨		市川市教育委員会「平成7年度市川市内遺跡発掘調査報告」1996
	40	国分5-1760-2他	24	なし	縄文土器、奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	41	国分2-1841-1他	9	土坑2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	42	欠番					
	43	国分2-1841-30	13	なし	-		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	44	国分5-1738-37他	27	奈良・平安時代竪穴建物1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	45	国分3-1845-27他	33	溝1	-		報告書未刊行
	46	国分2-1841-33他	24	中・近世包含層	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	47	国分5-1755-7	20	奈良・平安時代掘立1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成11年度市川市内遺跡発掘調査報告」2000
	48	国分5-1778-16	10	中・近世溝1	奈良・平安時代瓦		市川市教育委員会「平成11年度市川市内遺跡発掘調査報告」2000
	49	国分5-1755-1他	578	奈良・平安時代塼5、中・近世地下式坑1、道路1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成11年度市川市内遺跡発掘調査報告」2000
	50	国分5-1755-19	16	奈良・平安時代掘立1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成11年度市川市内遺跡発掘調査報告」2000
	51	国分5-1778-8他	26	奈良・平安時代竪穴建物1、溝1、土坑1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	52	国分5-1755-3	17	なし	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	53	国分3-1785-13	50	土坑1、溝1	縄文土器、奈良・平安時代土師器		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	54	国分5-1778-31	9	溝1	埴輪、奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	55	国分5-1770-2他	1116	奈良・平安時代竪穴建物5、掘立5、塼1、溝2	奈良・平安時代須恵器、土師器、硯、瓦、鉄製品、砥石	大衆院跡	市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	56	国分3-1845-44他	34	なし	なし		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	57	国分5-1767-3	16	奈良・平安時代竪穴建物3	奈良・平安時代土師器		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	58	国分3-1785-32	12	奈良・平安時代竪穴建物3、土坑1	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	59	国分5-1724-1他	45	なし	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	60	国分2-1798-2他	89	なし	奈良・平安時代須恵器、瓦		市川市教育委員会「平成12～15年度市川市内遺跡発掘調査報告」2008
	61	国分5-1770-2他	9	奈良・平安時代掘立1、土坑2、溝1	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	62	国分5-1723-2他	120	なし	なし		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	62-2	国分5-1723-2他	91	奈良・平安時代土坑1、中・近世土坑1	奈良・平安時代土師器、灰軸陶器、瓦		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	63	国分5-1770-2	245	溝1条	奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011

遺跡名	調査地点	所在地	調査面積 (m)	主な遺構	主な遺物	備考	報告書
下総 国分 寺跡	64	国分5-1762-1他	46	溝1条	奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	65	国分3-1782-7	32	奈良・平安時代竪穴建物1、土坑1基、溝1条	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	66	国分3-1845-4他	30	なし	縄文土器、奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	67	国分2-1801-12	14	奈良・平安時代竪穴建物1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	68	国分3-1846-3	938	奈良・平安時代竪穴建物4、掘立3、溝1、土坑3、ピット4、中・近世掘立3、溝8、土坑140、ピット281	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、中・近世土師質土器、金属製品		市川市教育委員会「平成17年度市川市内遺跡発掘調査報告」2015
	69	国分5-1752-1	23	奈良・平安時代竪穴建物1、土坑8	奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	70	国分3-1846-5	40	奈良・平安時代竪穴建物1、溝5、土坑6、ピット4	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	71	国分5-1774-32	16	溝3条	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦	寺域内区画溝	市川市教育委員会「平成12～18年度市川市内遺跡発掘調査報告」2011
	72	国分5-2061-2	25	奈良・平安時代溝1	奈良・平安時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	73	国分3-1845-1他	35	奈良・平安時代溝2、土坑2、ピット1	縄文土器、奈良・平安時代土師器、灰輪陶器、瓦		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	74	国分5-1738-7	39	道路1、中・近世溝2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	75	国分5-1738-15	74	奈良・平安時代竪穴建物1、溝1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、鉄製品		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	76	国分5-1754-2他	41	なし	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	77	国分3-1842-1他	669	中・近世溝4、土坑37	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
			1520	中・近世掘立1、溝6、地下式坑7、土坑83、ピット150	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、石製品、中・近世土師質土器、金属製品		市川市教育委員会「勾玉工房Mogi「下総国分寺跡第77次」2009
	78	国分3-1790-1	18	中・近世溝1条、ピット1基	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成19・20年度市川市内遺跡発掘調査報告」2012
	79	国分5-1724-4	23	なし	奈良・平安時代瓦		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	80	国分5-1778-13	27	奈良・平安時代竪穴建物2、溝1、土坑2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		市川市教育委員会「平成21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2013
	81	国分5-1775-1他	231	奈良・平安時代竪穴建物4、土坑2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	82	国分5-1724-1他	42	なし	なし		報告書未刊行
	83	国分5-1738-15	56	奈良・平安時代溝1、中・近世溝1、土坑2	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	84	国分5-1760-1他	35	なし	なし		報告書未刊行
	85	国分5-1755-2他	30	奈良・平安時代土坑8、ピット3	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		報告書未刊行
	86	国分2-1841-19他	30	中・近世台地整形1、土坑6	奈良・平安時代瓦		報告書未刊行
			286	中・近世台地整形1、土坑8、井戸1	奈良・平安時代瓦、中・近世陶磁器、板碑、銭貨		原史文化研究所「下総国分寺跡第86次」2016
	87	国分5-1778-27	18	奈良・平安時代掘立1、土坑2	奈良・平安時代土師器		報告書未刊行
	88	国分2-1792-1他	102	奈良・平安時代竪穴建物、溝	奈良・平安時代土師器	区画溝々	報告書未刊行
	89	国分5-1758-1他	23	なし	奈良・平安時代土師器、瓦、中・近世陶器		報告書未刊行
	90	国分3-1845-75	57	奈良・平安時代溝1	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦	西辺区画溝	報告書未刊行
91	国分3-1845-77	14	なし	なし		報告書未刊行	
-	国分5-1780-1他	3472	奈良・平安時代竪穴建物、掘立、溝、土坑	奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦	寺域確認調査	市川市考古博物館「下総国分寺跡」1994	
北下 遺跡	(1)	国分1-937-1他	64	奈良・平安時代瓦窯跡灰原1	縄文、奈・平須恵、土師、灰、瓦、木製品、石製品		
	(2)	国分5-965-1他	480	古墳時代前期竪穴建物1、奈良・平安時代土坑1、中・近世土坑21、地下式坑9	縄文土器、古墳時代前期土師器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、土製品、石製品、中・近世木製品		
	(3)	国分5-946-1他	617	奈良・平安時代瓦窯跡2、竪穴建物4、土坑2、鑄造遺構1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、土製品、金属製品、中・近世木製品	瓦窯跡	
	(3)-2	国分5-1724-12	30	奈良・平安時代竪穴建物5、大型土坑1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、鉄製品		
	(4)	国分2-1723-1他	49	奈良・平安時代土坑1、溝1、瓦包含3	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、トンボ玉		
	(5)	国分1-947-1他	345	奈良・平安時代鑄造土坑1、灰原々1、土坑6、溝7	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、土製品、石製品、金属製品、中・近世板碑		千葉県教育振興財団「東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書3」2011
	(5)-2	国分1-946-2他	830	奈良・平安時代鑄造遺構2、灰原1、溝5、土坑6、中・近世溝5、土坑3	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、中・近世金属製品、木製品	鑄造遺構	
	(6)	国分5-1722他	715	奈良・平安時代溝1、井戸1、瓦集中1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、土製品、中・近世木製品、板碑		
	(6)-2	国分6-2-1他	54	なし	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、中・近世木製品		
	(7)	国分5-1709-1他	1832	奈良・平安時代竪穴遺構1、中・近世井戸6、地下式坑2、竪穴遺構2、土坑89	縄文土器、古墳時代前期土師器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		
	(8)	国分5-1714-1他	660	奈良・平安時代祭祀遺構1、馬埋葬1、焼土集中6、溝2	縄文土器、古墳時代前期土師器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、金属製品		
	(9)	国分1-935-1他	120	なし	奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦		
	(10)	国分1-942-7他	538	奈良・平安時代流路1、溝1、土坑2	奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、鉄製品、木製品	祭祀遺物	
	(11)	国分6-953-1他	17	なし	奈良・平安時代瓦、中・近世木製品		
(11)-2	国分1-947-5他	1322	奈良・平安時代流路1、道路4、井戸1、瓦、土器集中2	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、鉄製品、木製品		千葉県教育振興財団「東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書6」2014	
(11)-3	国分1-939-1他	1149	奈良・平安時代流路1、溝2、土坑2	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、木製品			
(12)	国分1-951-3他	546	奈良・平安時代流路1、溝1、土坑6	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、鉄製品、木製品、股骨			
(12)-2	国分1-951-3他	84	奈良・平安時代流路1	縄文土器、古墳時代前期土師器、奈良・平安時代須恵器、土師器、瓦、木製品			
(14)	国分1-945-1他	753	奈良・平安時代流路1、鑄造遺構7、溝1、土坑1、瓦集中1	縄文土器、奈良・平安時代須恵器、土師器、灰輪陶器、瓦、鑄型、木製品	祭祀遺物	千葉県教育振興財団「東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書10」2017	
国分 平川 遺跡	1	国分5-1743-1他	114	古墳時代前期竪穴建物1、後期竪穴建物1	縄文土器、古墳時代土師器、滑石		市川市教育委員会「平成元年度埋蔵文化財発掘調査報告」1990
	2	国分5-1742	50	なし	奈良・平安時代土師器、瓦		市川市教育委員会「平成26年度不特定遺跡発掘調査報告」2015
	3	国分5-1744-9他	15	なし	縄文土器、古墳時代須恵器、土師器		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	4	国分5-1744-2	12	中・近世溝1、土坑1	縄文土器		市川市教育委員会「平成16～21年度市川市内遺跡発掘調査報告」2010
	5	国分5-1744-4他	28	なし	なし		報告書未刊行
遺国 跡分	5	国分5-1767-1	61	奈良・平安時代竪穴建物1	奈良・平安時代須恵器、土師器、砥石	寺域内の調査	市川市教育委員会「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告」1984
	11	国分5-1778-3	73	奈良・平安時代竪穴建物1、竪穴遺構2	奈良・平安時代土師器、瓦	寺域内の調査	市川市教育委員会「昭和59年度埋蔵文化財発掘調査報告」1985

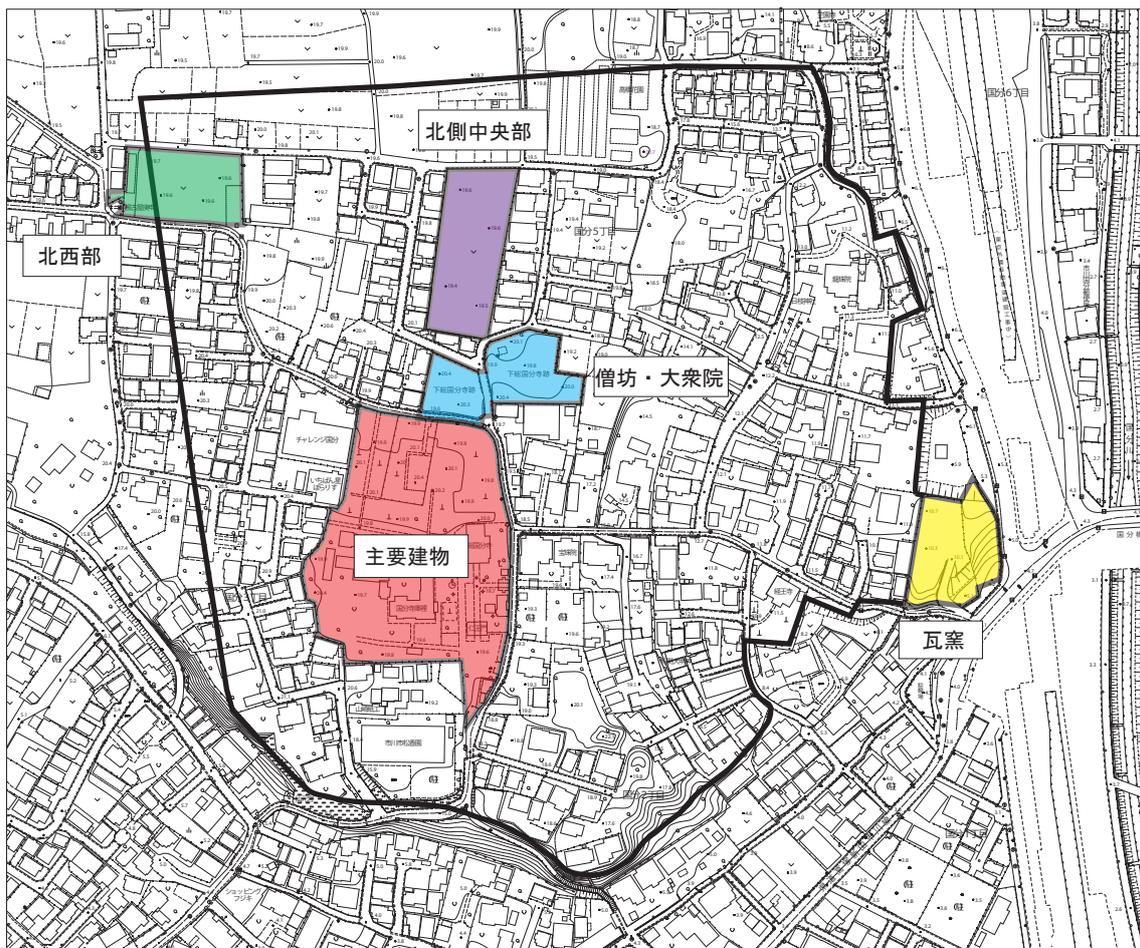
## (2) 下総国分寺跡の空間構成

下総国分寺跡では、中心となる金堂・塔・講堂などの建物群、僧坊、大衆院、講院、工房が確認されるなど、寺域内の広い範囲で建物の存在が認められる一方で、中心建物の南側では遺構はあまり見つかっていない。

### ①伽藍地

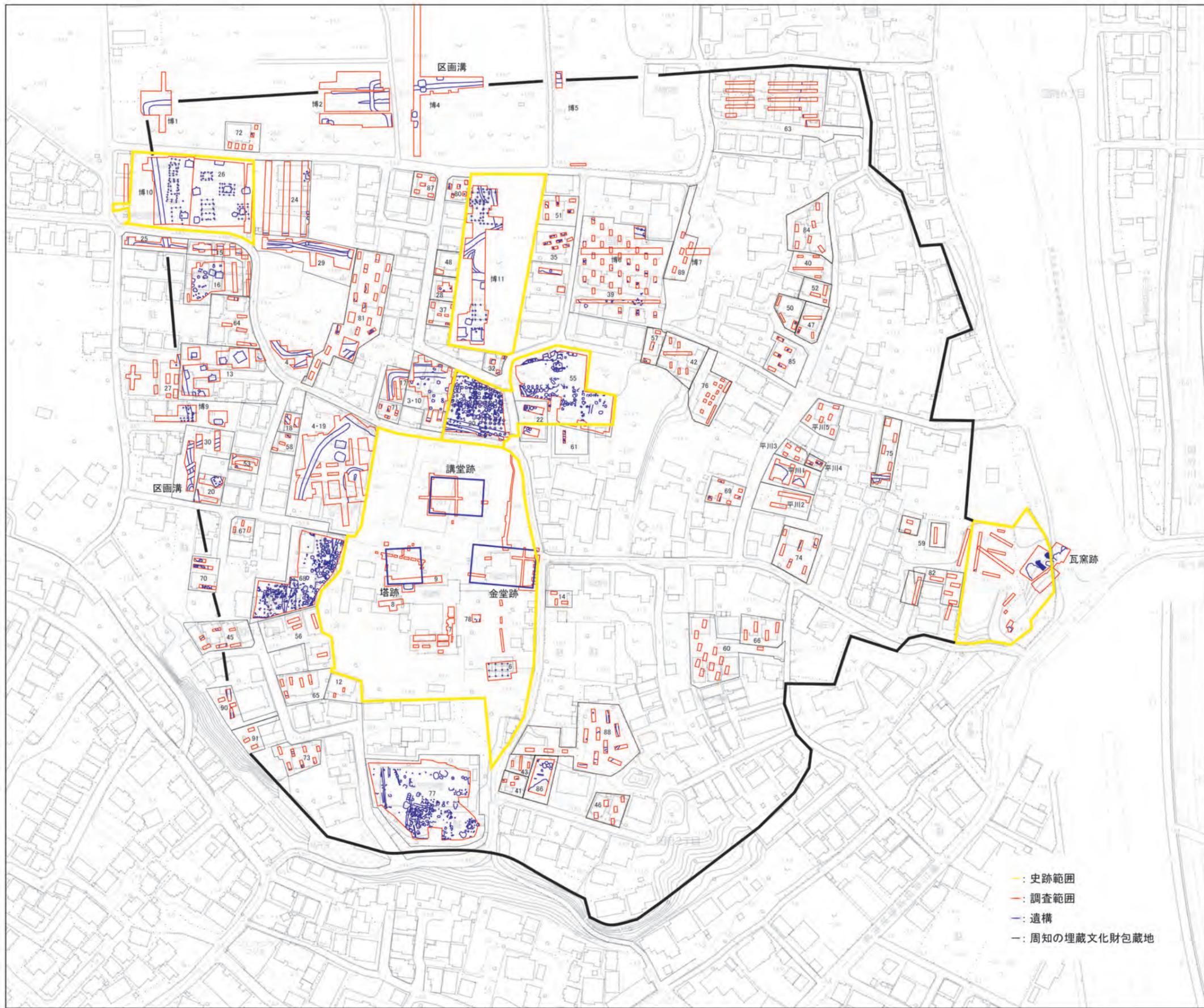
寺院の中心となる金堂・塔・講堂から構成される主要建物（堂塔）は寺域の中心よりも南西寄りに位置する。現状では中門や南門、鐘楼、経蔵、さらにはそれらを囲む回廊などは確認できていないが、金堂の前面では様々な儀礼が行われていたことが知られており、その空間を画す施設を有していた蓋然性は高い。

講堂の約20m北に僧の住まいである僧坊が位置し、僧坊と同じ溝で区画された空間に事務作業が行われた大衆院が配置されたと考えられている。大衆院には主軸を揃えた掘立柱建物が複数棟並び、計画的に配置されていたことがわかる。区画内には総柱建物も確認されており、倉なども建てられていたことが推測される。



第11図 史跡指定地の位置名称

(1/4,000)



第12図 下総国分寺跡における主な遺構配置図



創建期の瓦



補修期の瓦



講院



墨書土器

## ②寺院地

区画された僧坊と大衆院のさらに北には講院や厨<sup>くりや</sup>、営繕に係る工房跡などが展開し、さらに周辺にはそれに携わった人々の住まいなどが広がっていた。伽藍地よりも南の調査では、古代の遺構が確認されておらず、建物などは存在しない空間が広がっていたと考えられている。上総国分僧寺跡や上総国分尼寺跡でも南大門の周辺では遺構が確認されておらず、<sup>えんいん</sup> 蘭院や<sup>かえんいん</sup> 花苑院などの施設が想定されており、下総国分寺も同様であったと推測される。

僧坊や大衆院からやや北に離れた位置の調査区（史跡の北部地区）では「講院」の墨書土器が出土し、掘立柱建物の一部が講師院と想定されている。同調査区では厨と考えられる竪穴建物が確認されており、食堂の一部と推測されている。さらに、寺域の北西部では、営繕に関わる修理所などが確認されている。

これらの施設を区画する施設や寺域内の道路については不明な部分が多いが、金堂と塔の中間の南側延長上には中門と南門が推定され、南側は台地の縁辺ではあるが、国衙などが位置する国府台や須和田方面から下総国分寺に至る参道などが存在していたと考えられる。また、塔の中軸延長と寺域の区画溝との交点には架橋施設が確認されており、架橋施設から伽藍地に至る道の存在なども推測される。さらに、北下瓦窯で生産された瓦の運搬や北下遺跡で行われた境界祭祀との関連から、北下瓦窯跡から現国分寺に至る現道（御堂坂）付近に、瓦の運搬や通路となる道を想定することも可能であろう。

## (3) 伽藍配置と主要建物

### ①伽藍配置

下総国分寺跡では、東側に金堂、西側に塔が東西に並び、その中間の北側に講堂が配置された。この堂塔の配置は法隆寺式伽藍配置と呼ばれる法隆寺の西院伽藍と同じ配置であるが、中門や鐘楼、経蔵、回廊は未確認である。

### ②金堂跡（本尊を安置した建物）

昭和41年の発掘調査により現国分寺の本堂の地下で基壇が確認された。トレンチ調査により本堂の東を中心に部分的に基壇を断割って断面等が記録された。礎石が一部残されていたが、原位置を留めているものはなかった。

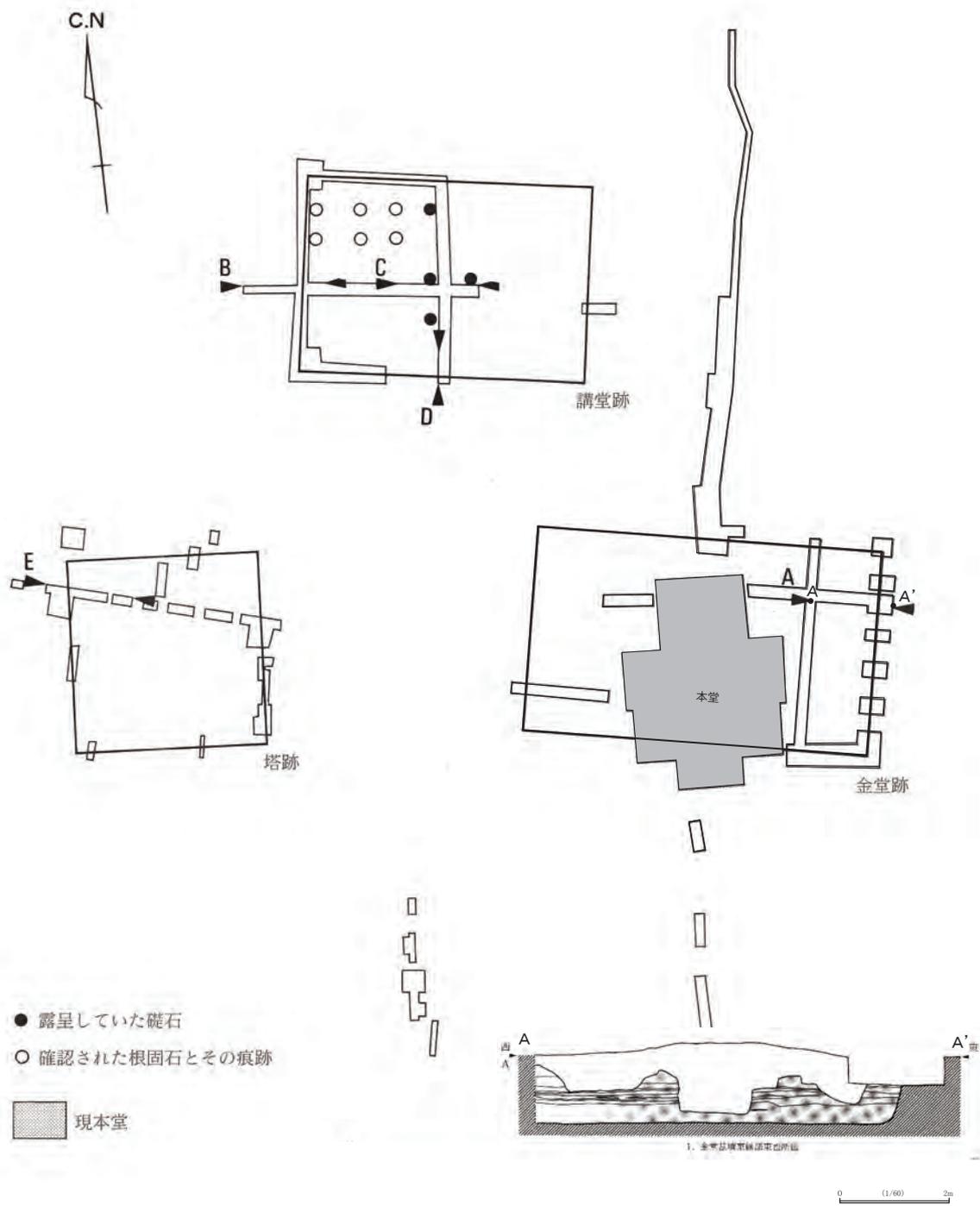
基壇は掘り込み地業を有し、版築により構築されていた。基壇上部の縁辺は崩れていたため基壇化粧などは残されていなかったが、掘り込み地業の大きさから東西31.5m、南北19mの規模と考えられている。主軸方向は座標軸で東に4°（磁北で東に11°）傾く。

掘り込み地業は地山を70cm程掘り込み、版築にはローム・黒色土・暗褐色土が用いられ、上部になるに従い石や瓦が少量混入した。

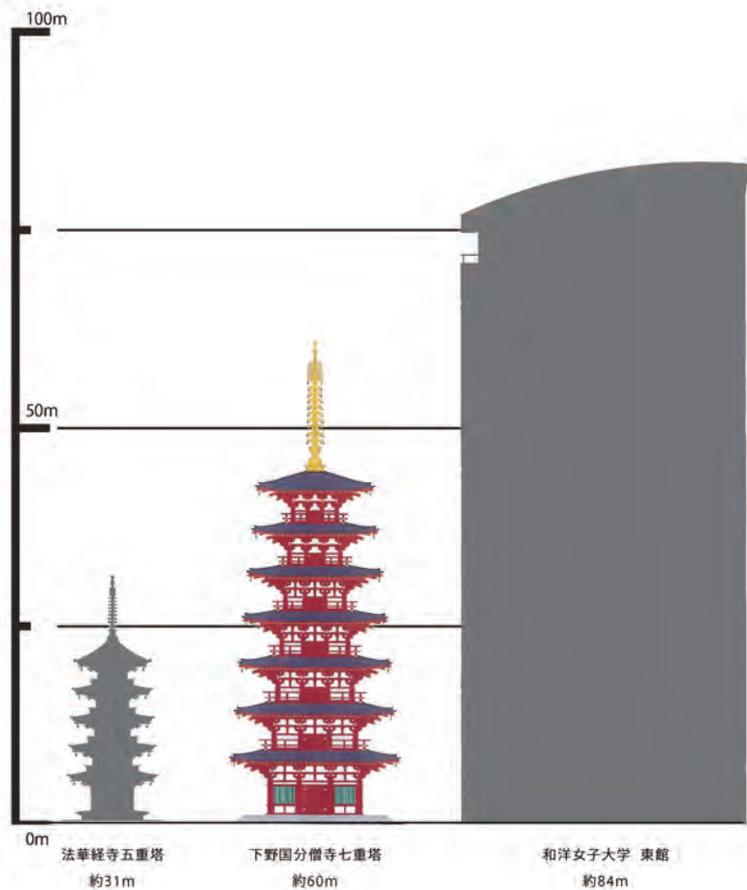
### ③塔跡（七重塔）

金堂の基壇の端から約25m西、現在の表書院のすぐ北側から墓地にかけて塔の基壇が確認された。削平が激しく基壇上部は残されておらず、基底部付近のみが残されていた。礎石は残されておらず、トレンチ調査のため、心礎は未確認である。

基壇の掘り込み地業の規模は東西18m、南北18mと正方形を呈す。主軸方向は座標軸で西に3°



第13図 主要建物（金堂・塔・講堂）の基壇跡



第 14 図 七重塔の高さ比較図

(磁北で東に4°) 傾く。版築には黒色土や暗褐色土が多く用いられており、金堂跡や講堂跡の基壇に用いられた土とは異なった様相で、石や遺物の混入も認められない。

#### ④講堂跡（経典の講読や説教を行った建物）

金堂と塔の間から約20m北に位置する。現在も礎石が露呈しているが、表土を掘り込んで据え付けられているため、当時の位置から動いていることが確認されている。トレンチの断面では根固めの痕跡が観察されている。

基壇の掘り込み地業の規模は東西26m、南北18m。主軸報告は座標軸で東に9°傾く。版築に用いられた土は金堂跡と似ているが、やや細かく版築されている。土器や瓦が少量混入する。調査時の所見では、基壇の断面で創建当初の版築を壊すように新たな版築が行われていることが認められることから、西側に拡張されたとも考えられている。

#### ⑤堂塔の造営順

基壇の主軸は塔が西に3°、金堂が東に4°、講堂が東に6°振れているように、塔と金堂・講堂で主軸が異なることから、塔と金堂・講堂の造営に時期差があったことがうかがえる。前後関係については、僧坊や北西部の調査区で確認された掘立柱建物の傾きが西から東に変更されていることなどから、塔が金堂・講堂よりも先行して造営されたと考えられている。

#### (4) 下総国分寺跡のその他の主要施設・付属建物

(SB：掘立柱建物、SA：柵列、SI：竪穴建物)

##### ①僧坊（僧の住まい）第20次SB6・9。

SB6は東西棟の掘立柱建物で、やや西に傾く。規模は桁行6間（13m）以上、梁行1間以上の長大な東西棟と想定できる。柱穴には1回の建替えが認められる。柱間は、1ヵ所が8尺（2.4m）で、その他は9尺（2.7m）を測る。

SB9は3間以上の建物で、SB6から建替えられた僧坊と考えられる。1回の建替えが認められる。柱間は7尺（2.1m）を測る。

##### ②大衆院（寺の事務を行う施設）第20次SB2・第55次SB01ほか

第20次の僧坊の北でと東に近接隣接した第55次調査で溝に区画された掘立柱建物群が発見され、大衆院と考えられた。

第20次SB2はSB6・9の北側で、第17・20・55次と続く区溝の南側に位置する東西棟の掘立柱建物で、身舎は5間×3間、南北2面に廂を持つ（東西12.6m、南北10.3m）。

第55次のSB01は東西棟の掘立柱建物で、身舎は6×2間以上、北側に1間分の廂を持つ。東側には、SB02～04との間にSA01が位置する。SA01の中軸線がSB01の中央になると、SB01は身舎6×3間で南北に廂を持つ建物（東西13.2m、南北10.6m）に推測される。柱穴には、1・2回の建替えが認められる。出土遺物は8世紀後半～10世紀初めの土器が出土している。

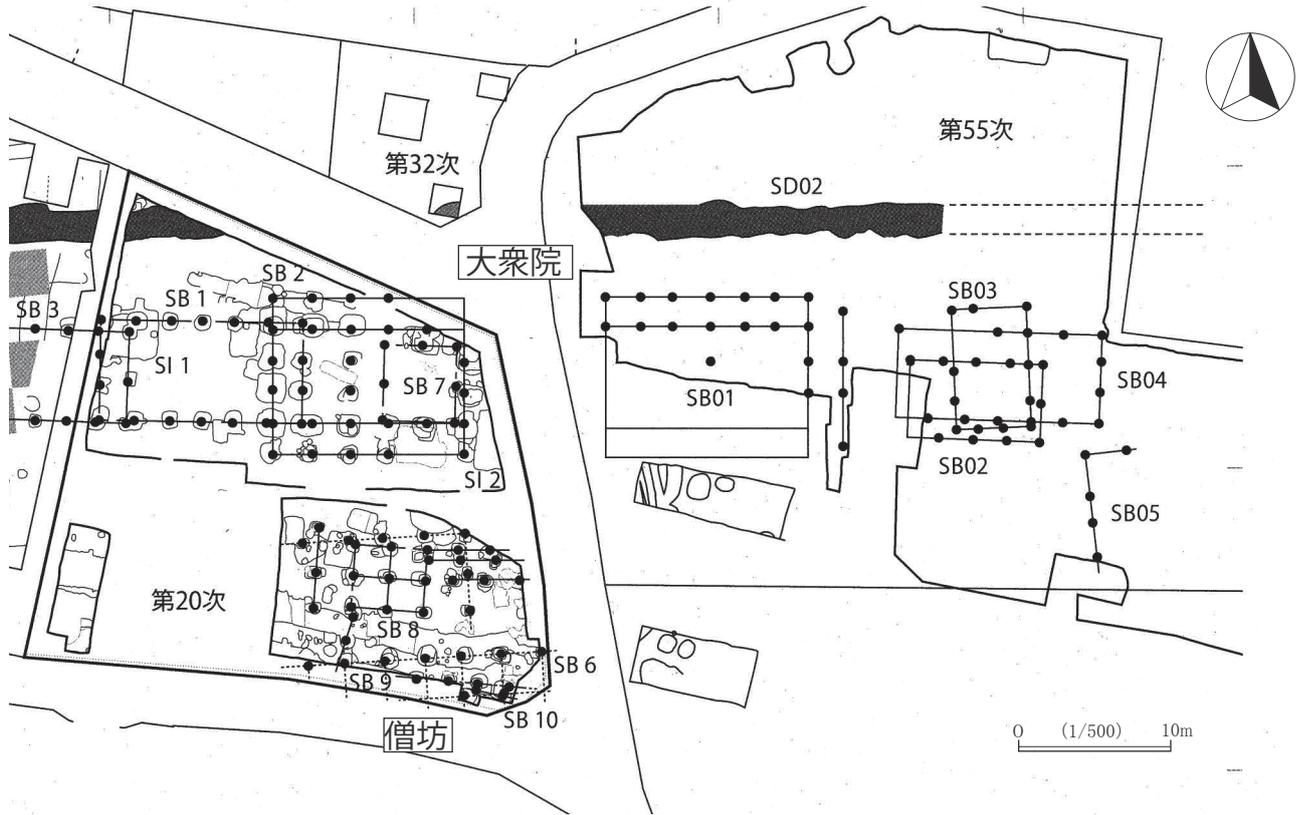
第20次SB2の西側には身舎と柱筋を同じくするSB03が、第55次SB01の東側には同じく6×3間の掘立柱建物であるSB04（東西13.4m、南北5.9m）が位置し、同時期の建物と考えられる。

##### ③付属施設

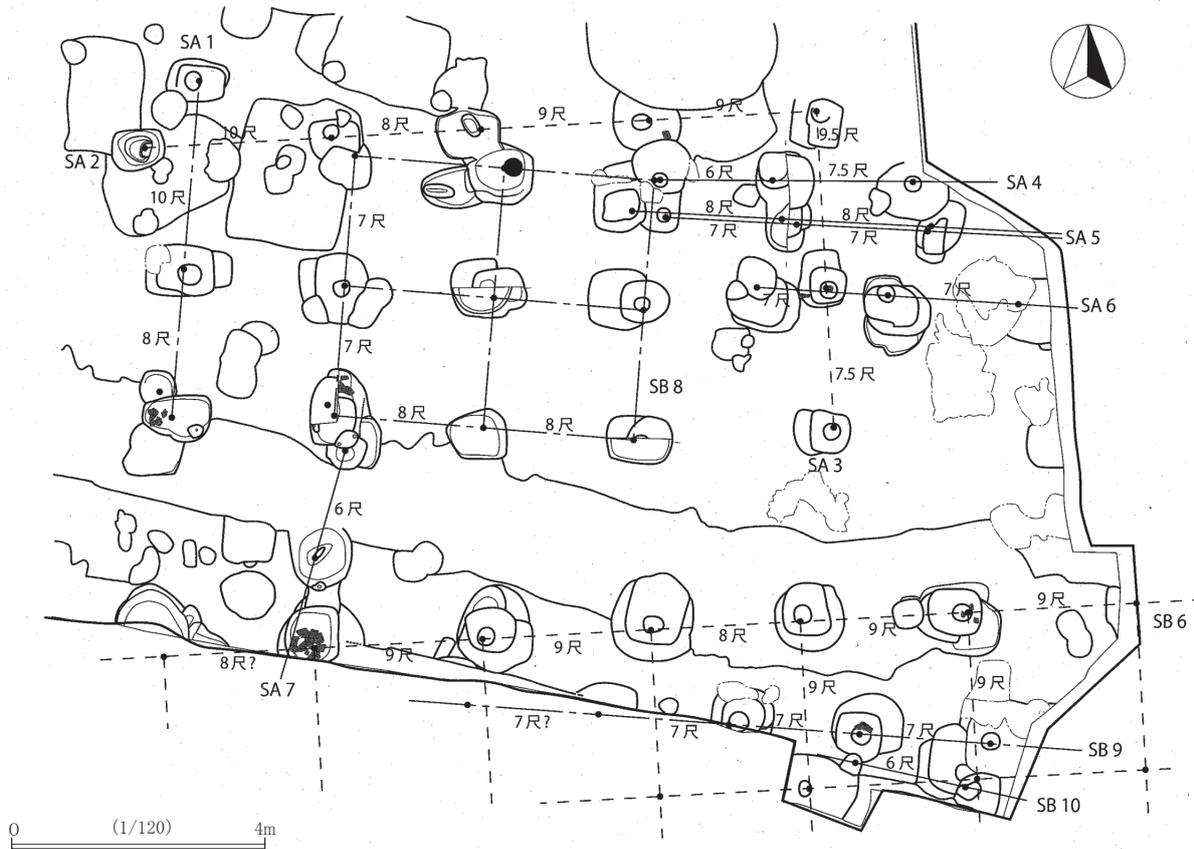
史跡の北西部の調査区では寺域の西側を区画する溝や掘立柱建物14棟、竪穴建物9棟などが、北側中央部の調査区では掘立柱建物7棟、竪穴建物4棟などが確認されている。

北西部のSB01～03、SB04～06は南北に並ぶ建物で、それぞれ西に傾く建物から東へ傾く建物へ2回の建替えが行われている。SB04・05は4間×2間の規模の大きな南北棟の建物（南北10.7m、東西5m）である。鍛冶工房（SI06）は建物内には炉が構築され、鉄滓<sup>てっさい</sup>などが出土している。

北側中央部の北側で検出したSB14は桁行5間（10.3m）以上、梁行2間（5.2m）の東西棟の建物である。南側で検出したSB08は身舎3間×2間、西側に廂を持つ建物となる。鍛冶工房（SI09）が確認されている。建物内には炉が構築され、鉄滓などが出土している。

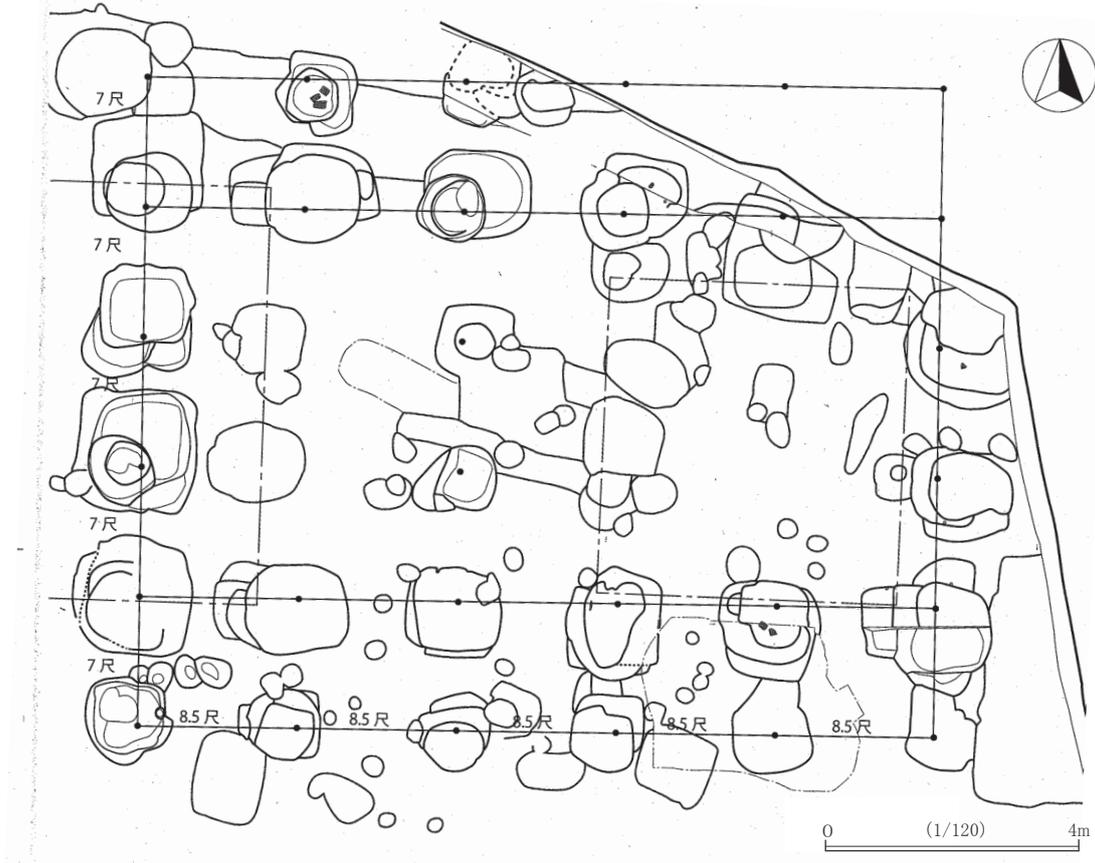


僧坊 (第 20 次 SB6・9)

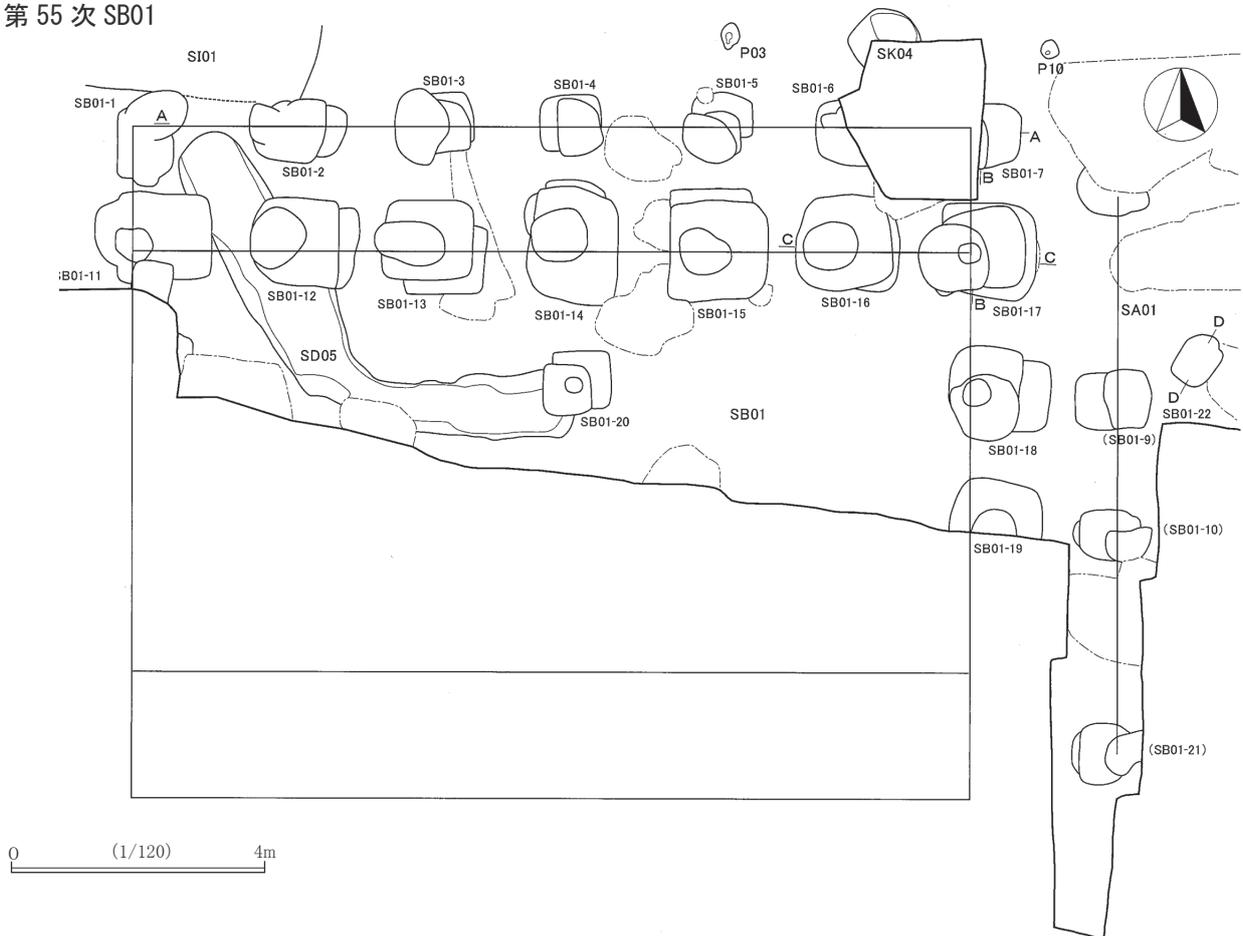


第 15 図 僧坊・大衆院 (1)

第 20 次 SB2

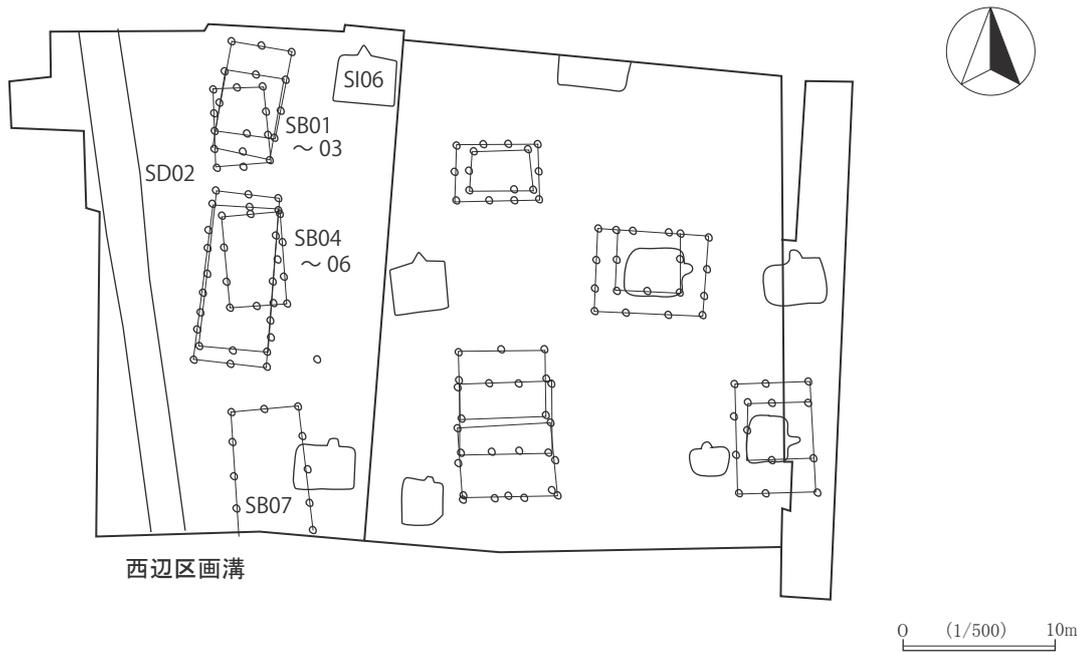


第 55 次 SB01

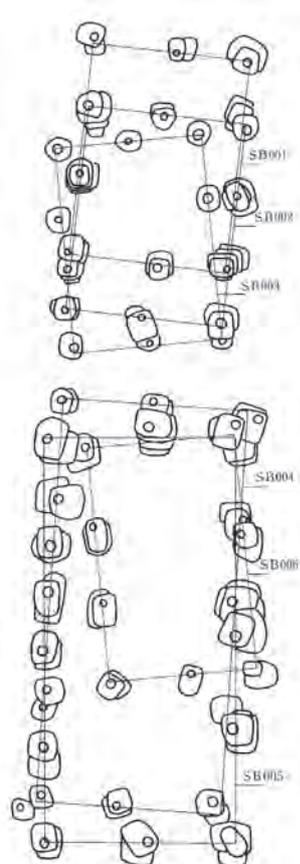


第 16 図 僧坊・大衆院 (2)

全測図

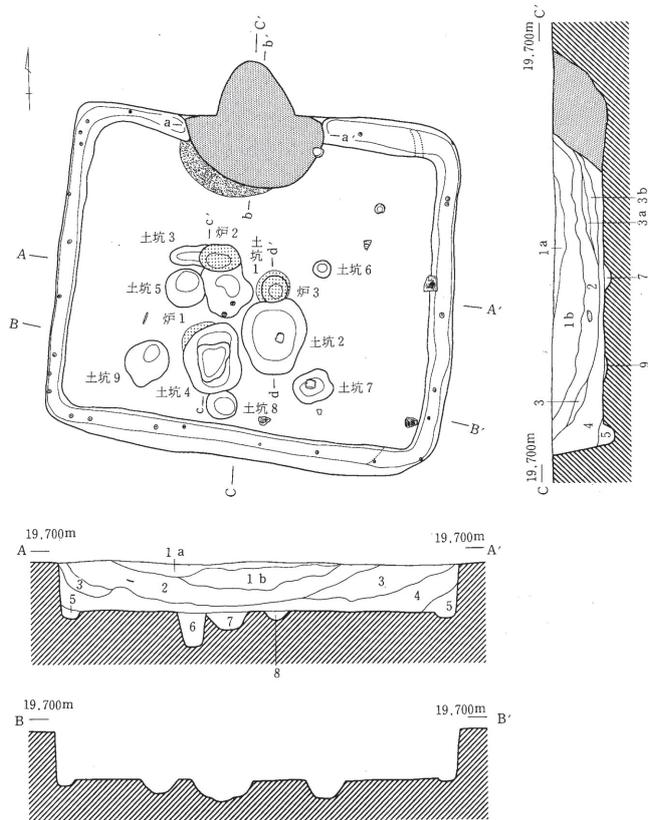


B01 ~ 06



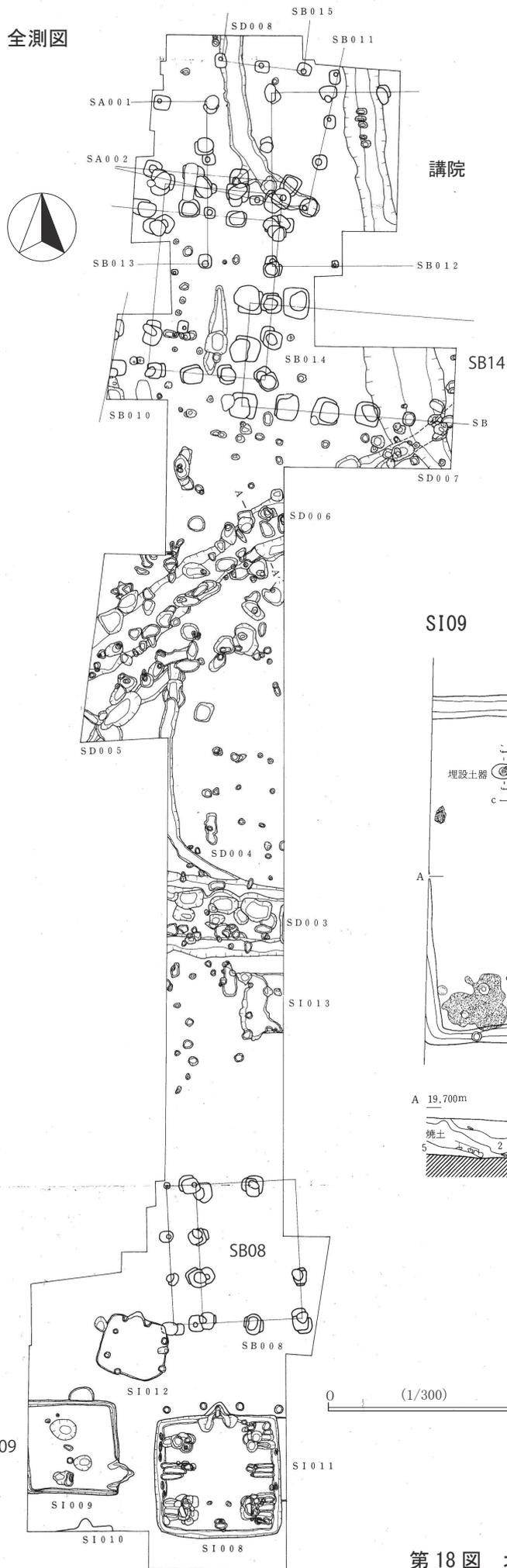
0 (1/200) 5m

SI06

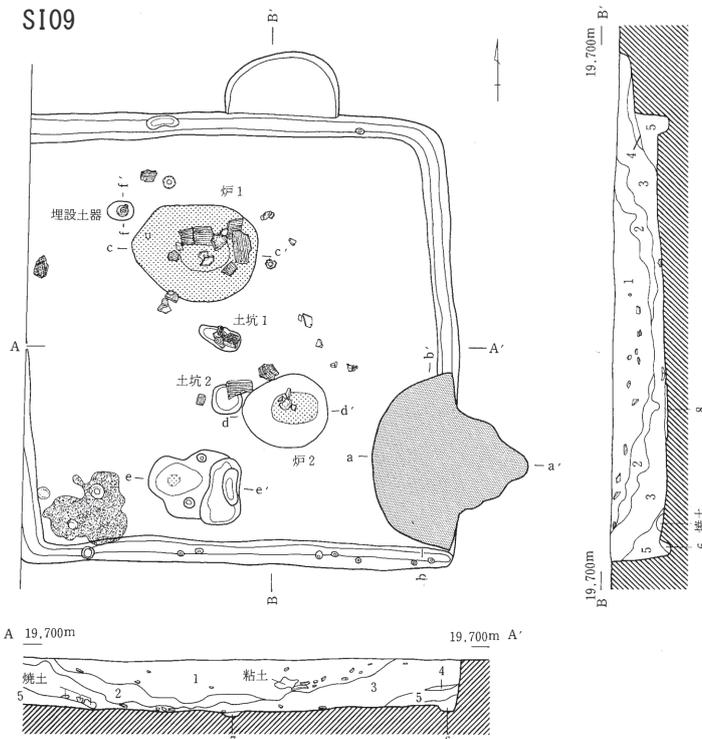


第 17 図 西北部

全測図



SI09



0 (1/300) 10m

第18図 北側中央部

## (5) 瓦生産工房

### ①瓦窯跡

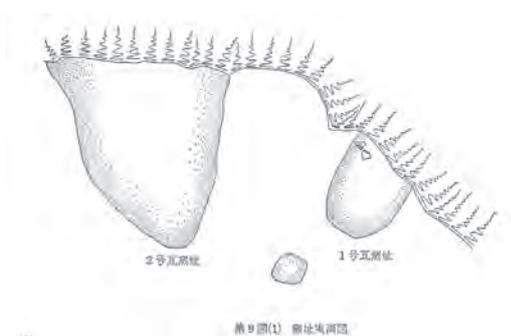
平16年の北下遺跡の発掘調査では、登窯と平窯の2基の瓦窯跡が並んで発見された。周辺では、既に失われてしまったが、2基の瓦窯跡が発見されており、4基以上の窯跡が操業していたことが知られている。

登窯は現状の長さ5.2m、幅1.4～1.6m。最高地点の標高は10.5mで、最下段との比高差は1.7m。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、一部オーバーハングする。壁面内側は被熱痕跡が顕著で、レンガ状に硬化した部分が多い。焼成部には地山を掘り残して階段を14段設け、段の縁を保護するように破碎した丸瓦や平瓦片が並べられた。煙り出しは窯尻から2段目の階の北東側に敷設され、地山を長さ75cm、深さ10cm程掘り窪めている。出土遺物は、瓦類がほとんどで、土器類はほとんど出土していない。

平窯は、焼成部と燃焼部が遺存する。最高地点の標高は10.5m。焼成部は奥行き1.9m、幅2.3m、確認面からの深さ64cm。両側壁には壁体を熱から保護するため瓦類を用いており、観察できる範囲ではすべて鬘斗瓦を使用。凸面を上に向け、前後2列に積み、隙間にスサ入り黄褐色砂を充填する。奥壁中央と両隅の計3カ所に壁面を掘り込んだ煙道が認められる。焼成部の底面には焼土が広く堆積し、焼成部と燃焼部の境界付近には切り出した砂岩が左右一対で置かれていた。燃焼部は幅1.6m、焼成部との比高差は40cm程を測る。出土遺物は瓦類が中心で、土器も出土している。

### ②工房跡

窯跡周辺の発掘調査及び地下レーダー探査の結果、土坑や作業場跡など、瓦生産に関連した可能性がある遺構が確認されており、周辺には瓦の工房跡の存在が推測される。



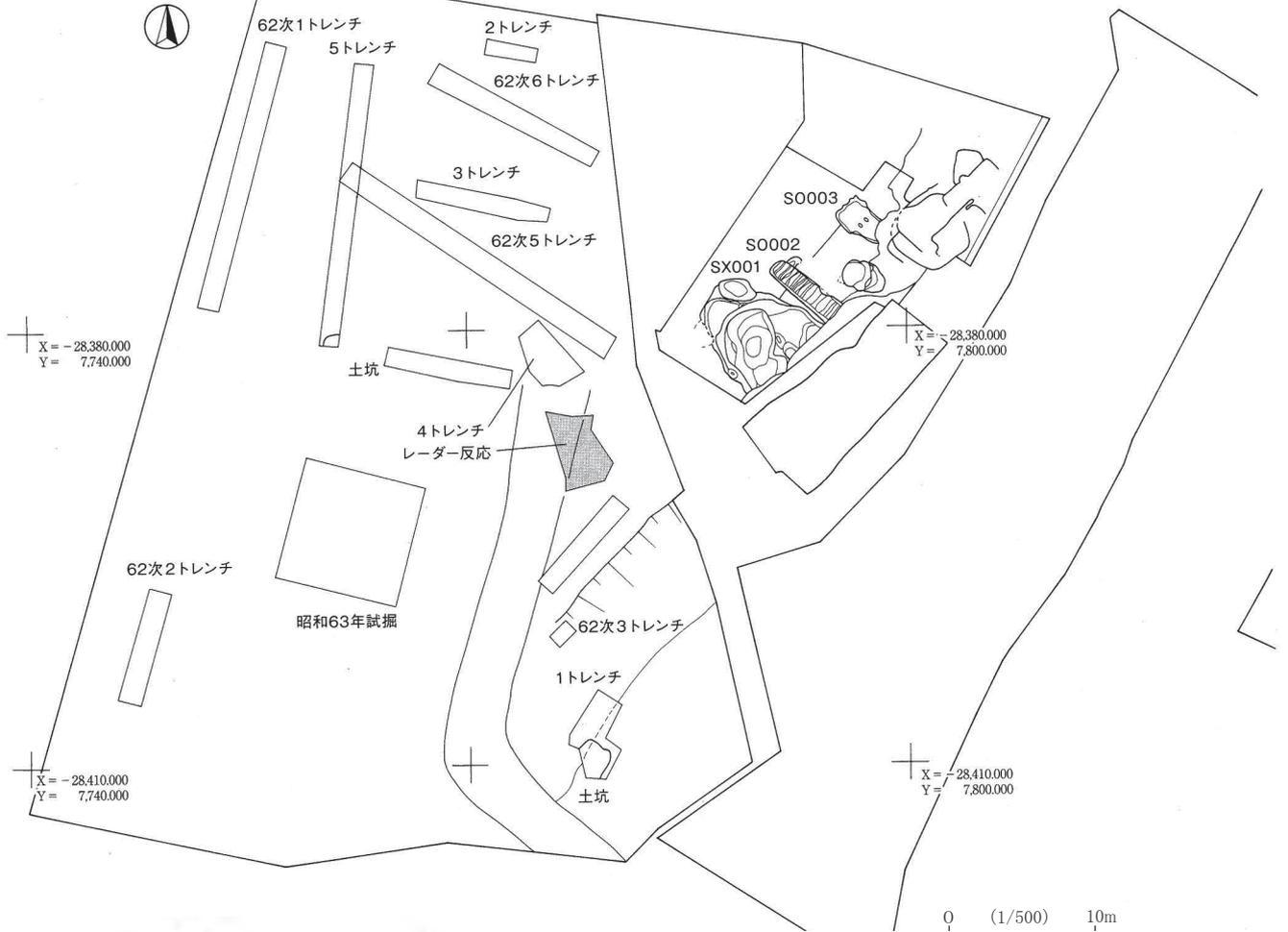
瓦窯の断面



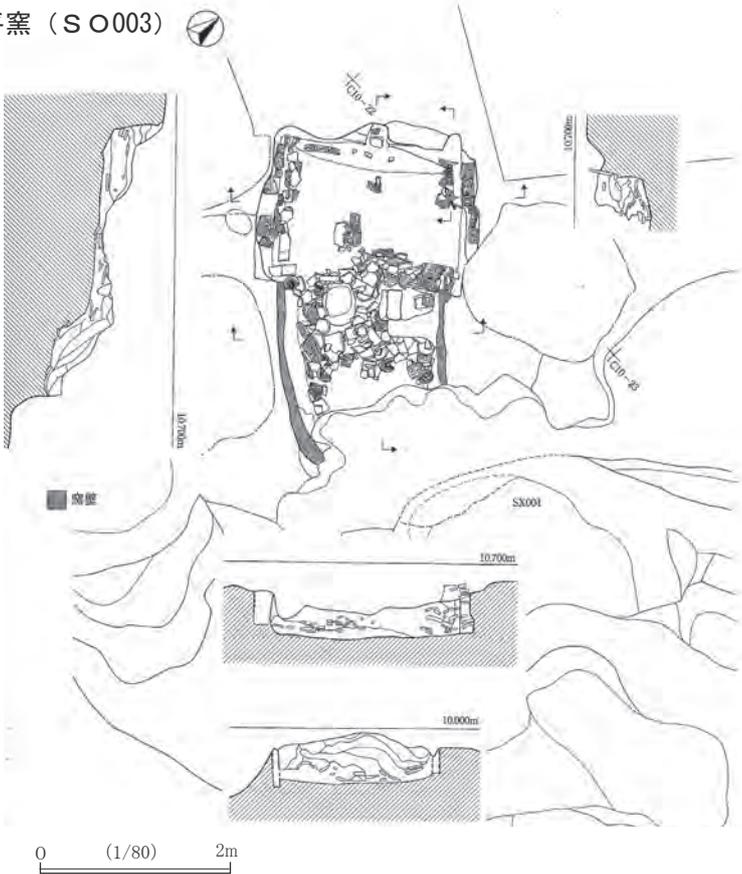
瓦の出土状況

第19図 昭和41年確認の瓦窯跡

瓦窯跡周辺調査



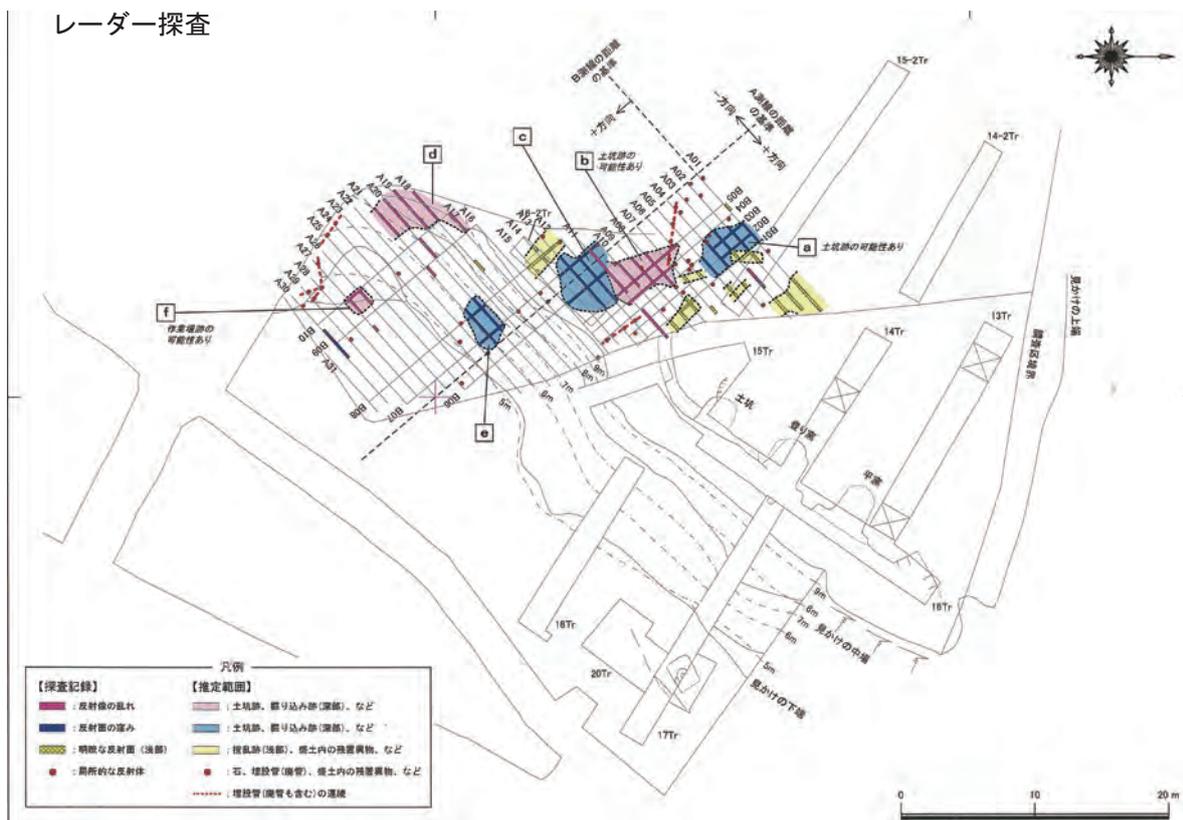
平窯 (S O003)



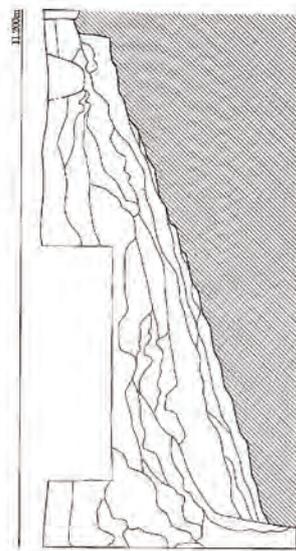
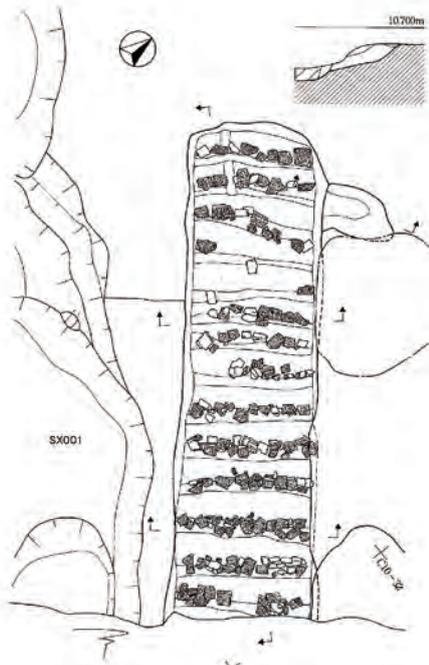
SO-003窯跡全景

第20図 瓦窯(1)

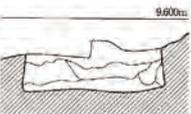
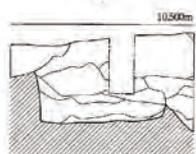
レーダー探査



登窯 (S002)



SO-002窯跡全景



第21図 瓦窯 (2)

#### 4. 下総国分寺の沿革

**創建：**仏教は6世紀中頃日本に伝わり、その後、寺院が古墳に変わる権威の象徴として各地に建てられるなかで、国家との係りが深まり、天平13年(741)、聖武天皇は天然痘や飢饉の流行に対するため、各国に僧寺と尼寺からなる国分寺を建立する命令が出され、下総国分寺と下総国分尼寺が建てられることとなった。

国分寺の造営は、その後天平19年(747)と天平勝宝8年(756)に催促の命令が出ていることから、順調に進まなかったことがわかる。下総国分寺の寺院地や堂塔の傾きの違いも、このような創建の事情が反映して生じたものと考えられている。下総国分寺の完成の時期は、遅くとも8世紀後半で、まず塔を中心に寺院地の範囲をきめ、やや時間を置いて国分寺の金堂・講堂と国分尼寺の造営があったと考えられている。

**補修：**9世紀前葉(818年)に関東で大地震が起きたことが文献から知られ、他の国の国分寺や国分尼寺では、この地震の影響により建物が補修されたことがわかっている。下総国分寺でも8世紀末～9世紀初めに新たな瓦が作られたことから、屋根瓦の補修が行われたことがわかっているが、地震との関連は不明である。新しく作られた瓦の文様には創建期の宝相華文ではなく、蓮華文と唐草文が採用された。

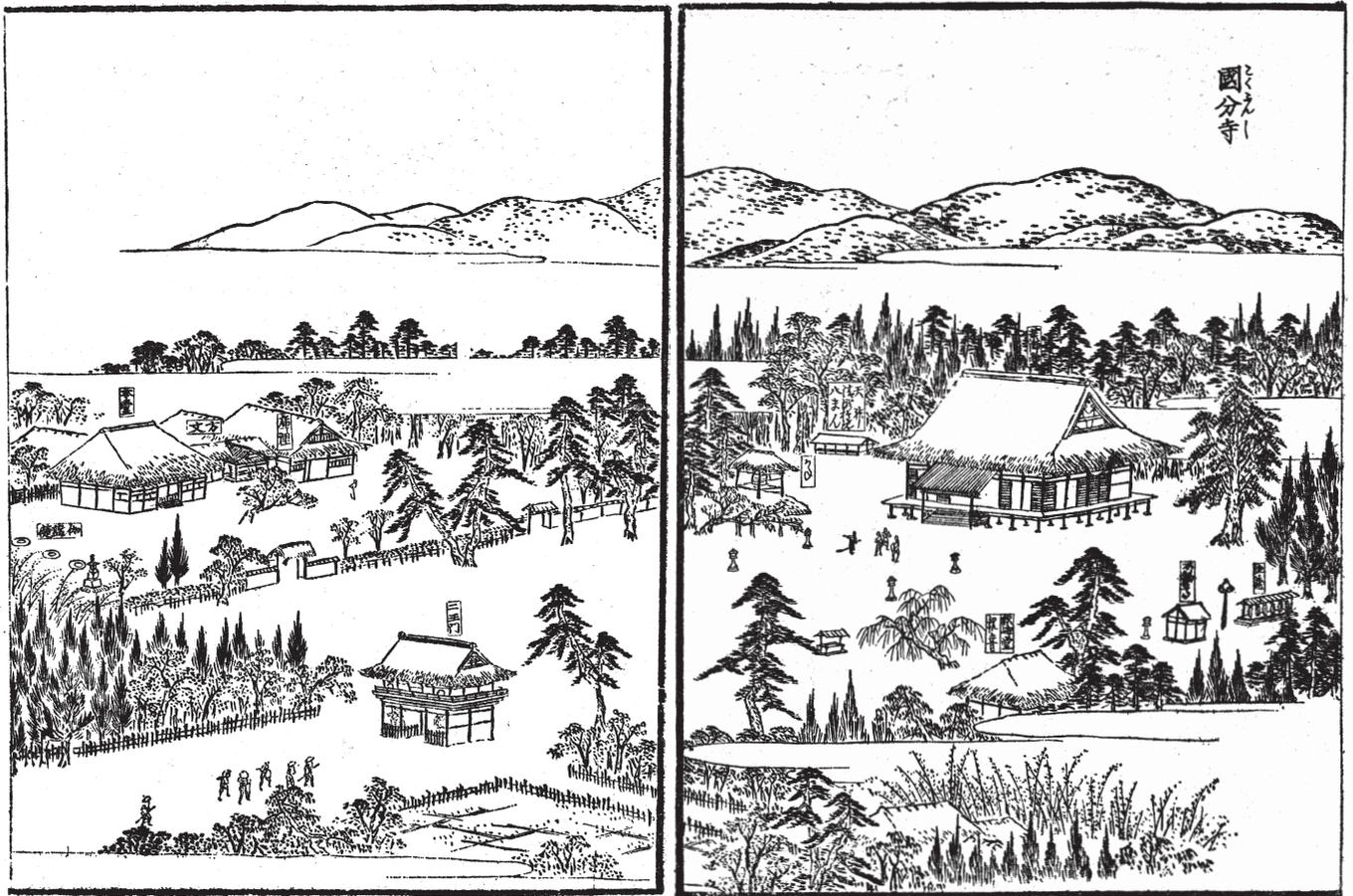
その後、9世紀中頃にも補修されたと考えられているが、新たに瓦が焼かれた痕跡が見られないため、国分寺の主要建物の屋根に変化があったと推測されている。一方で、寺域内の調査では、9世紀にも多くの建物が確認され、もっとも施設が充実した時期と考えられており、下総国内各地の郡名や郷名を記した墨書土器が出土している。

**規模縮小・衰退：**9世紀後半から11世紀にかけて、東国では<sup>ふしゅう</sup>俘囚の反乱や在地勢力の反乱が相次いだ。下総国でも875年の俘囚の反乱により官寺が焼かれ、さらには1003年には平惟良により下総国府が焼き討ちされた。こうした出来事により、発掘調査でも10～11世紀を境に下総国分寺に変化が起きたことが読み取れる。

10世紀中頃までには、それまで数回掘り返され維持されてきた寺院地区画の溝が埋り、寺の範囲が明確ではなくなり、講堂付近は12世紀までには墓地となっていたことがわかっている。10世紀以降の変容については、国府台遺跡でも確認されており、国の機能全体が変化した時期であり、律令国家の衰退に伴い国家の寺院である国分寺の運営が大きく変容したものと見える。

**中世以降：**中世の下総国分寺から現在まで法灯を灯す現国分寺までの寺院の状況については詳しくわかっていないが、多くの国分寺が10世紀以降中央・地方の有力寺院の末寺となり寺勢を維持し、12世紀には鎌倉幕府や朝廷により保護されている。さらに14世紀(室町時代)には西大寺の僧により西国を中心に国分寺が再興され、その後も守護大名や戦国大名による保護を受けていたことが知られ、下総国分寺と同様に現在まで法灯を灯す国分寺が多い。

下総国分寺は、中世には公領(国衙領)となり、千葉氏一族の国分氏が国分寺の運営に関与していた可能性が推測されており、現国分寺には<sup>こくぶ</sup>国分五郎胤通<sup>ころうたねみち</sup>の墓と伝えられる<sup>ほうきやういんとう</sup>宝篋印塔が2基建てられている。その他にも、現国分寺には鎌倉時代～戦国時代にかけての供養塔である板碑が多数残されており、中世以降も宗教的拠点として活動していたことが知られている。



『市川市史』第6巻より転載

第22図 『江戸名所図会』 国分寺

## 5. 周辺の関連遺跡

### (1) 下総国分尼寺跡

国分尼寺は国分寺と同じく聖武天皇が天平13年（741）に発した「国分寺建立の詔」により各国に建立された尼寺で、正式名称を「法華滅罪之寺」と呼ばれた。下総国分寺跡から西に約50mに位置し、中心部分は国の史跡に指定され、公園として保存されている。

かつては「昔堂<sup>むかしどう</sup>」と呼ばれ、下総国分寺跡と考えられた時期もあったが、昭和7年（1932）に「尼寺」の墨書土器が発見され、下総国分尼寺跡であることが分った。墨書土器には「西寺」・「西」などの文字も見られることから、同じ台地上に並び、西側にある下総国分尼寺を「西寺」、東側に位置する下総国分寺を「東寺」とも呼称されていたようである。

昭和42年（1967）に行われた発掘調査により、国分尼寺の金堂や講堂が発見されたことから、同年12月27日に下総国分尼寺跡として国の史跡の指定を受けた。

#### 【下総国分尼寺跡の範囲・大きさ】

下総国分尼寺跡では、寺域を区画する溝が、北側・東側・南側で確認され、北東隅と南東隅も確認された。西側は台地縁辺までと推測され、そこから下総国分尼寺の寺域が東西324m、南北330mの大きさと考えられる。

寺域は不整形な矩形で、金堂の中心で中軸線に直交する東西線と東辺溝が交わる位置で、東辺溝が4m途切れて通路となっていた。

付属地では寺域北西部に寺の下働きをした人や営繕にかかわる施設や倉などを確認している。また尼寺からは「窪苑」と記された墨書土器が出土しているので、畑や花畑が寺域内におかれたことがわかる。瓦窯は寺域の西側斜面にあるといわれるが実態は不明である。

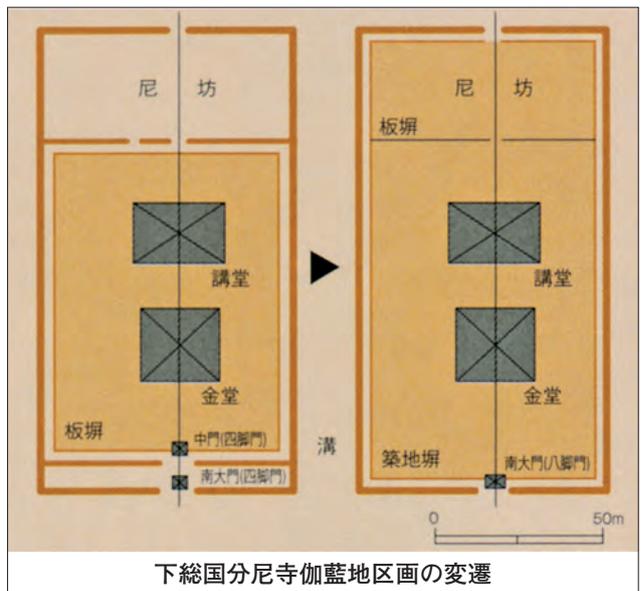
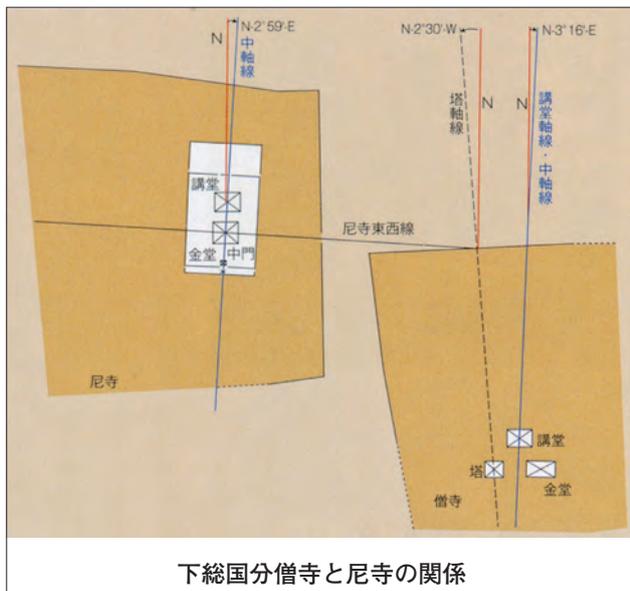
【下総国分尼寺跡の伽藍地と主要建物】

下総国分尼寺跡では、金堂・講堂と尼坊の一部を確認している。伽藍地の区画の溝と塀を確認しているが、その区画に大衆院は入らず、宗教的空間のみを区画している。金堂と講堂が南北に並んだ東大寺式伽藍配置である。金堂・講堂は国分寺の傾きとは差異があるが、やはり東偏している。講堂の北側の区画では数時期の建替えのある掘立柱建物を確認しており、尼坊に推定している。

創建期には、区画の南面に掘立柱の四脚門を設置（中門）し、さらに南に掘立柱の四脚門による南大門が置かれた。尼寺では、9世紀前葉に伽藍地の区画施設の改変があり、区画の範囲も南北に拡張する。中門は見られなくなり、南大門は八脚門となった。

【出土遺物】

多種多様なものが見られるが、特に国分尼寺を表す「西寺」、「尼寺」と書かれた墨書土器が発見されている。寺域を区画する東辺溝からは黄白色と緑で彩られた希少な二彩の小壺が発掘されている。



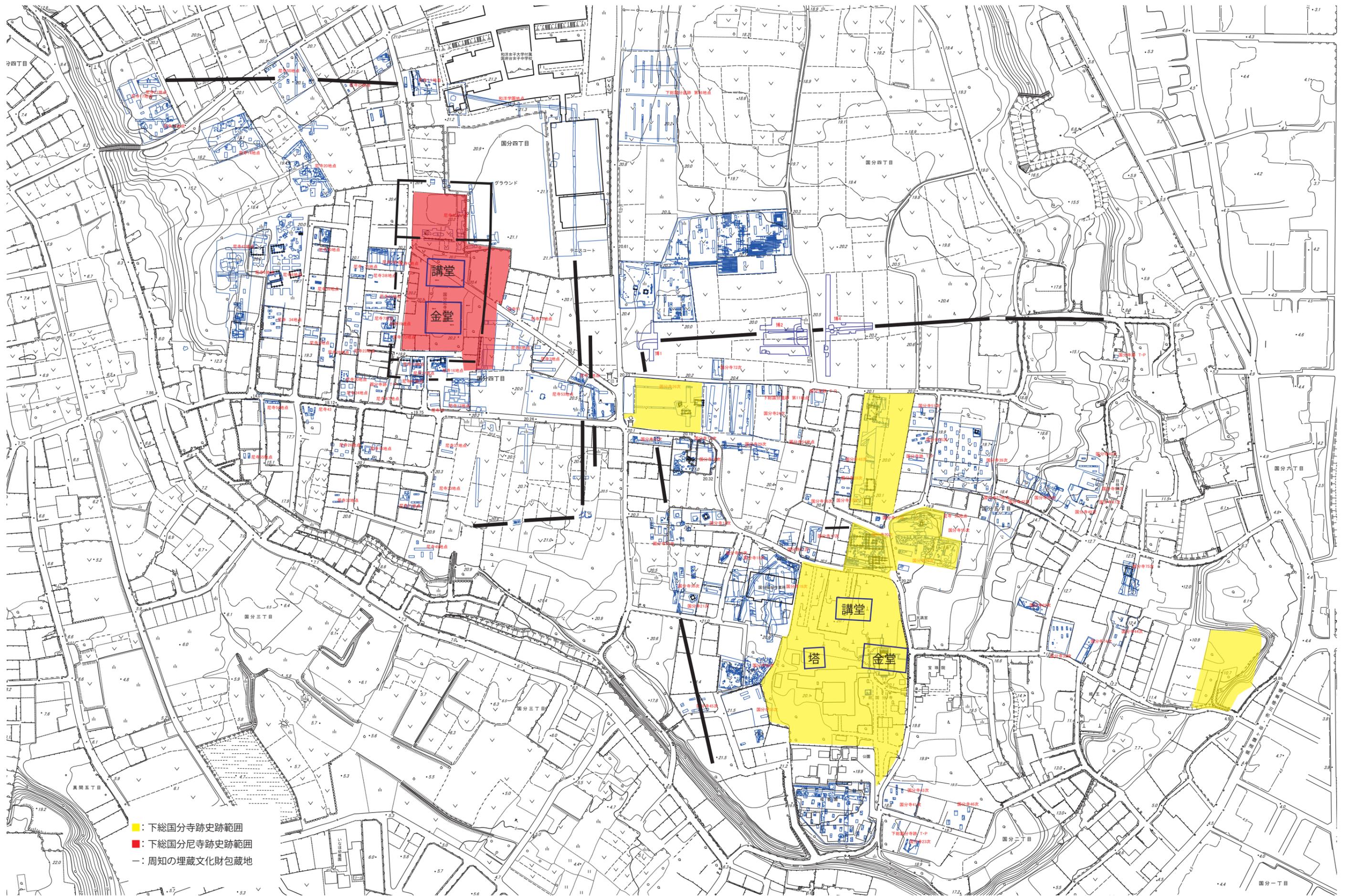
第23図 下総国分尼寺跡の調査成果



「尼寺」の墨書きがある土器



出土した二彩の小壺



第 24 図 下総国分寺跡・下総国分尼寺跡の主な調査成果

1/2,500

## (2) 下総国府（国府台遺跡とその周辺）

### 【国府・国衙・国庁】

下総国分寺が創建された奈良時代（8世紀）中頃の日本は60余りの国という行政区画に分かれていた。現在の千葉県北半部を中心に、東京都・埼玉県・栃木県・茨城県の一部は下総国に含まれ、その中心は国府と呼ばれた。国府には、国の役所である国衙やその関連施設、国司館、市などが広がり、古代の都市を形成していた。国衙の中心は国庁と呼ばれ、国司が政務を行い、様々な儀式が執り行われた。

国府の中心は、現在のスポーツセンターの敷地内に「府中」の地名が残り、六所神社が祭られていたことから、江戸川に面した国府台の南端付近であることが推定されていた。昭和55年（1980）の市営総合運動場の発掘調査では、8世紀になると竪穴建物や掘立柱建物が多くなり、出土土器に大型の皿や大型の甕などが多いことが確認されるなど、国府の中心地（国庁・国衙）がこの付近に存在したことが確認できるようになった。現在のところ、国庁や国衙は発見されていないが、道路遺構の発見などから、国庁は現在の野球場付近と考えられている。

須和田で「右京」、下総国分寺で「□京」墨書土器が出土したことなどから、下総国府は京と認識され、そのうち国府台周辺を「右京」、下総国分寺跡周辺を「左京」と認識していたと推測される。この下総国府の範囲は、最も広い時期で南北3.5km、東西3.5kmの範囲に及び、北下遺跡では国府域の境界祭祀に関係すると考えられる遺物も出土している。

### 【駅路と津】

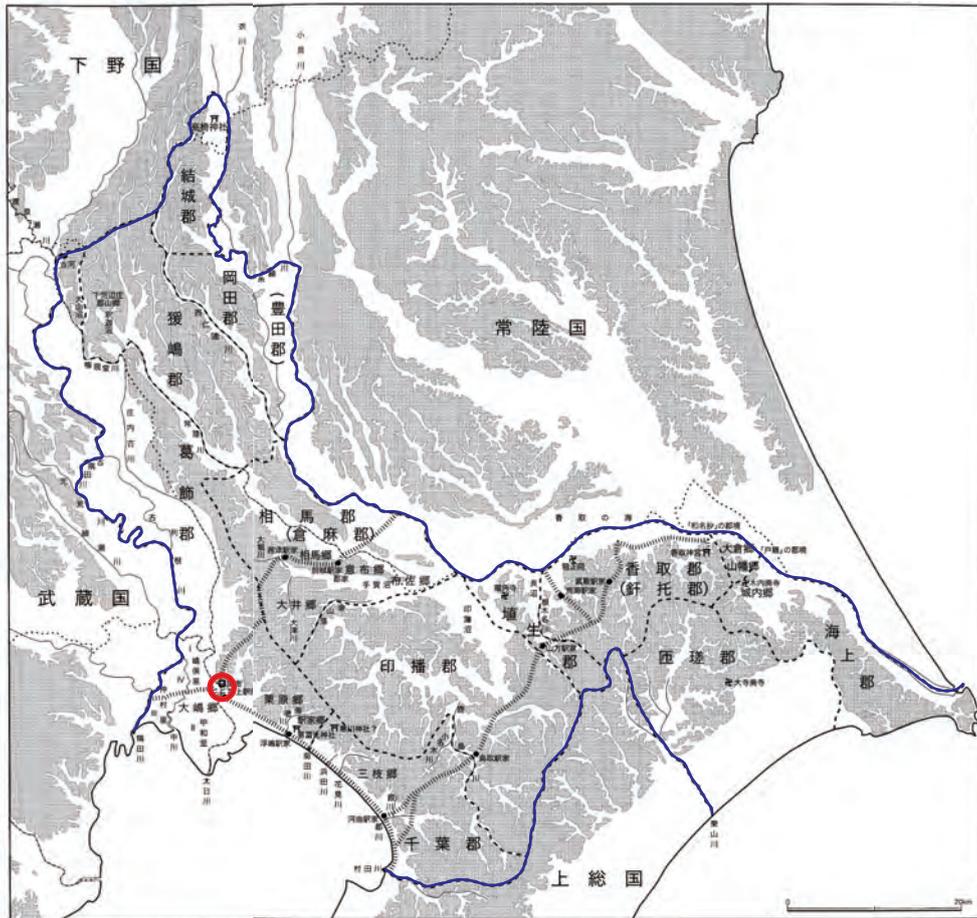
律令国家の成立にともない、都と各地を結ぶ幹線道路（<sup>えきろ</sup>駅路）が作られた。駅路には約16kmごとに駅家が置かれることになっていた。下総国と上総国を結ぶ駅路は、東京湾岸の砂州を通っていた。砂州が平坦で低地の安定した場所であったからである。下総国の井上駅家は市川砂州の西端、市川2・3丁目付近に推定されているが、これは江戸川を渡る目的もあったと考えられる。国府台や国分寺跡からは井上駅家を示す「井上」墨書土器が出土している。

国府台西側を貫流する江戸川は、古代・中世には太日川と呼ばれる渡良瀬川の下流部で、東京湾に注いでいた。この太日川は、東京湾と武蔵国東側・上野国・下野国西側を結び、関東地方の水運の大動脈であった。江戸川の河口付近に真間川が合流している。真間川は、かつては一帯が、『万葉集』に<sup>やまべのあかひと</sup>山部赤人らや東歌に詠われた真間の<sup>てこ</sup>手児（古）<sup>な</sup>奈伝説に登場する「真間の入り江」の推定地であった。入り江は舟（船）が停泊するのに最適の場所であり、国府にかかわる津（国府津）が置かれていた。このような地勢から、市川は陸と川と海の交通が交わる場所であり、古代の国府が置かれた理由もここにある。

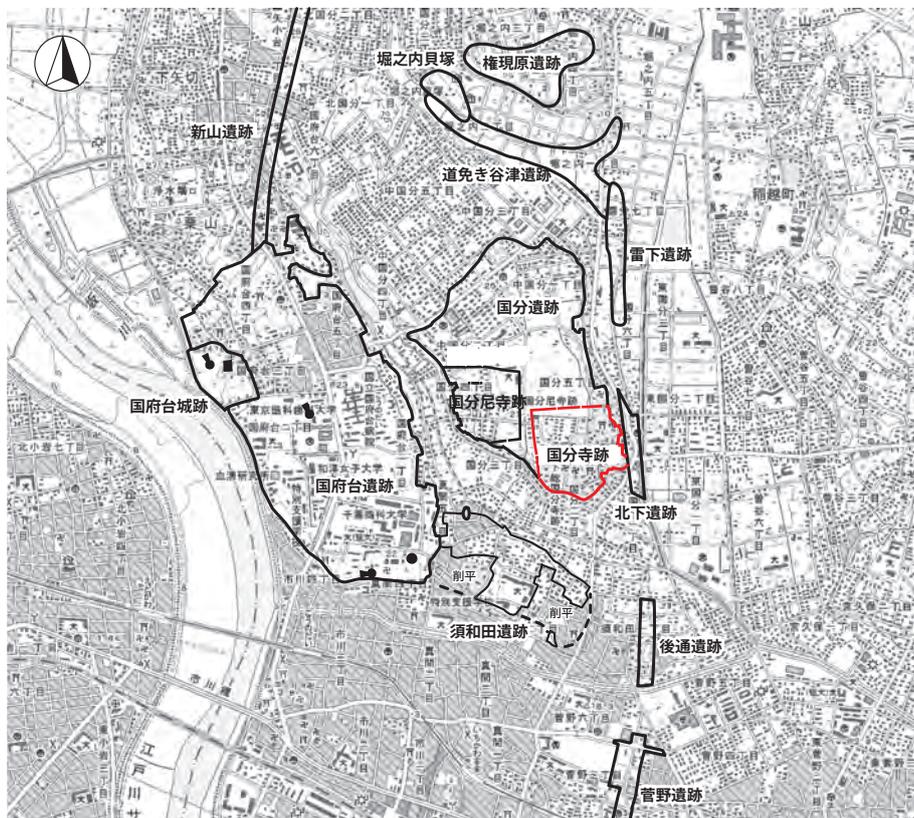
771年に武蔵国が東山道から東海道に移管されたことにより、それまで相模国から上総国に海を渡り陸路で下総国に至った駅路が、相模国から武蔵国を通り下総国に至るルートに変わり、下総国から常陸国と上総国に至ることになった。こうした交通体系の変化により、下総国府を介した人の往来はより活発となり、多くの人や物が行き交うことになった。

### 【市と衢】

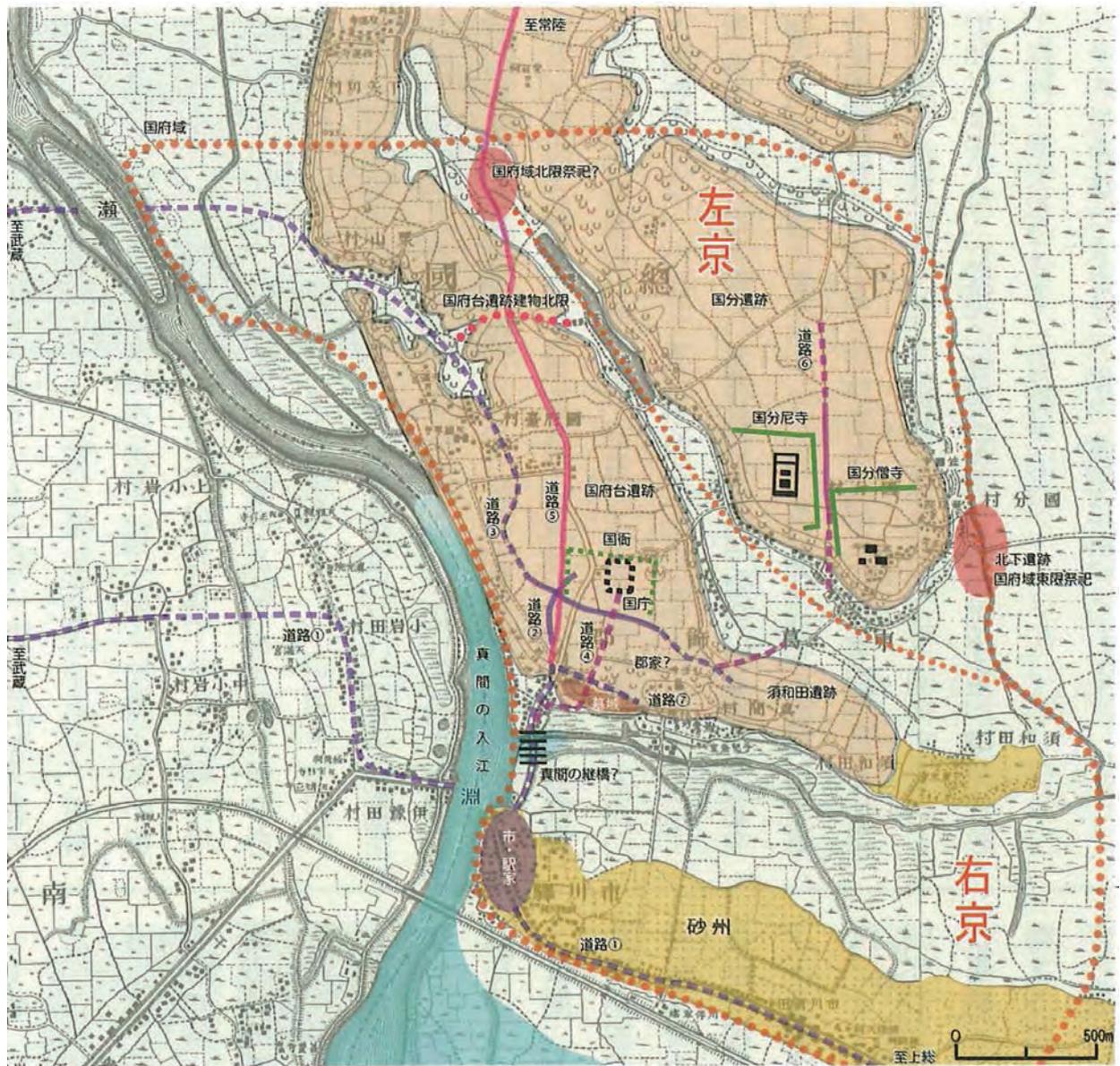
市川砂州は交通の要所で、物流の拠点となり物資の取引が行われる市がおこった。市川という地名は川辺にあった市に由来する。その名は14世紀までたどれるが、市川に市が成り立つのは古代である。この砂州の市は、もともと真間の市というべき地域の人々が利用し、自然発生的に成立した地方市であったが、その市を利用してその後国府市が成り立ったと考えられる。国府市は、国衙や国分寺などの運営で必要な物資や国司など役人の生活用品を調達し、国府や国司が放



第 25 図 下総国の郡と郷



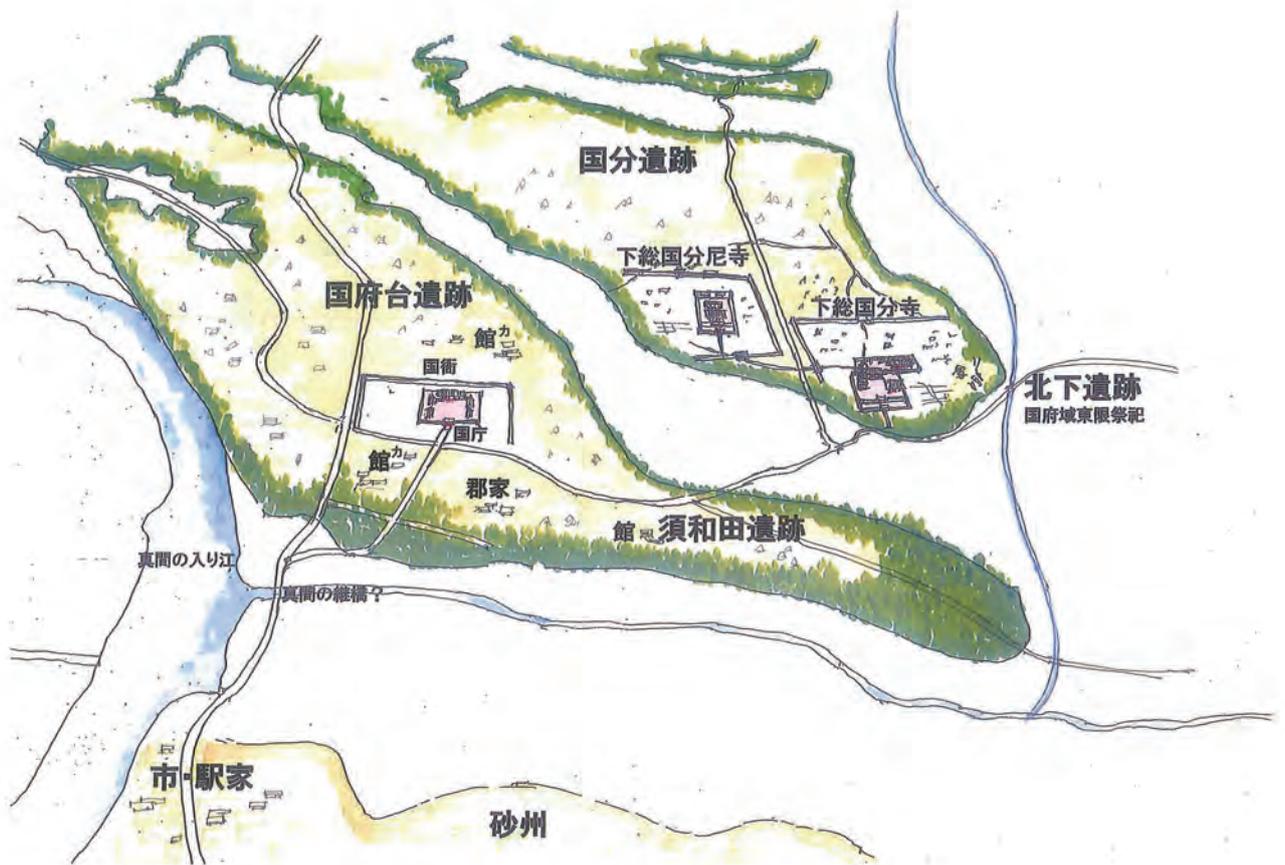
第 26 図 下総国分寺跡周辺の遺跡



第 27 図 迅速測図にみる下総国府と関連の遺跡



下総国府域の航空写真



第 28 図 下総国府の復元イメージ図

出した物資を売るための官市であるが、そこには物資やその取引にかかわる人々だけではなく、国府や国分寺にかかわる人々、都と往来する人々など様々な目的の人々が集散し、にぎわう衢（道路が交わり分かれる場所）となっていた。

### (3) 北下遺跡

北下遺跡は、下総国分寺跡の主要建物から東へ直線距離で約150mの台地縁辺から国分川沿いの低地にかけて立地し、現在は、南北に細長い範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。

発掘調査は、東京外かく環状道路の建設に伴い平成14年から実施されており、既に述べた瓦窯跡以外では、竪穴建物や鑄造遺構、国分川の旧河道、祭祀遺物などが見つかった。

#### 【生産遺構】

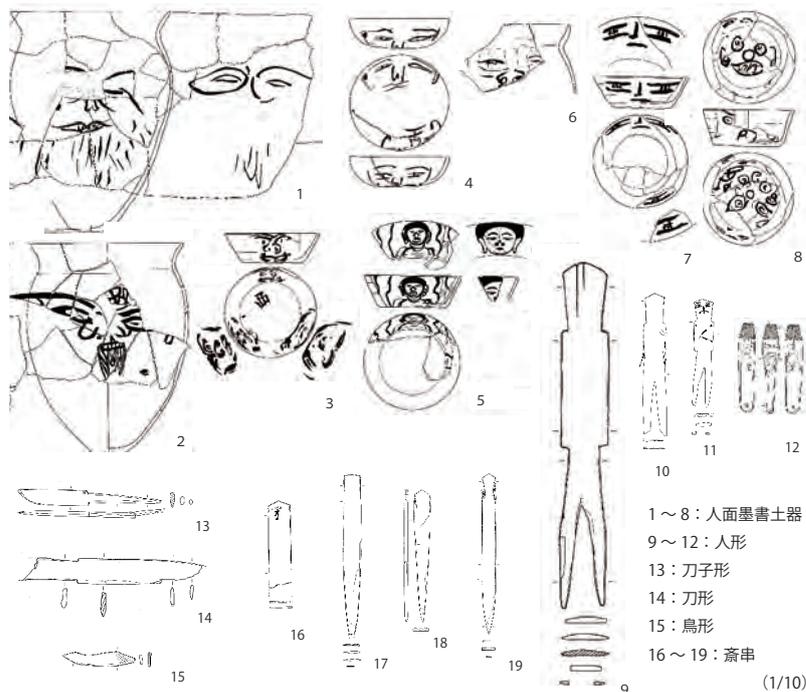
国分台の台地縁辺から裾部の低地にかけての調査では、奈良時代以降と考えられる梵鐘鑄造遺構と複数の鑄造関連遺構が検出された。また竪穴住居や土坑などの奈良・平安時代の集落跡も発見された。遺物では、奈良・平安時代の土器や国分寺に関連すると考えられる「金」「講院」「寺」などの墨書土器や、瓦塼類、梵鐘片や鈐帶金具などの銅製品、鉄製品など多くの遺物が見つかった。出土瓦類のうち、軒瓦は国分寺創建期のものが大半を占める。こういったことから、この調査区域の中央部は、下総国分寺と一体となった生産関連の遺構が集中していることが明らかとなった。

#### 【旧河道と祭祀】

低地の調査では、蛇行する幅7～8m程の旧河道が検出され、古代における国分川の旧河道と捉えられている。川辺の平坦面では道路や溝、整形面、土坑などが発見され、柳の河畔林の存在がうかがえる調査成果も得られている。

旧河道では護岸を保護する施設や土坑などが確認され、奈良・平安時代の土器や瓦、木製品等が数多く出土した。旧河道底面では土器が集積された状態でも出土している。

河道内堆積土や周辺区域の覆土からは、出土遺物で数量的に多数を占めたのは、下総国分寺創建期の瓦・塼類と、8世紀後半頃から10世紀頃の土器類である。瓦には、歪んだものや大きな塊となった溶着瓦などが多く含まれており、近接して瓦窯跡があることから、焼き損じと見られる瓦が当時の国分川に投棄されたものと考えられる。また、この遺跡の性格を示唆する出土品として、祓に用いられた遺物と理解できる人面墨書土器や人形などの形代類、齋串のほか、供物の可能性がある桃核などの種実類や獣骨類、供物台の天板の可能性のある板、松明の燃えさし等が出土した。また出土文



第29図 北下遺跡出土の祭祀遺物

字資料も豊富で、「神門朝臣 奉」の刻字をもつ白木弓をはじめ、律令国家の地方組織に関わる墨書がある土器、仏像・仏面墨画土器、金光明四天王護国之寺の一字とみられる「金」と記した墨書土器が出土した。

このように国分川旧河道周辺に営まれた遺跡は、歴史的環境と立地、遺構群の構造と出土品の組成からみて、下総国府の東の境界にあたる川辺において、国府の官人等により執り行われた儀式・行事の場として、8世紀後半頃から10世紀ころまで、長期にわたり維持管理された区域であったと捉えることができる。また、8世紀末頃に位置づけられる仏像・仏面墨画土器や「金」墨書土器の出土は、近隣に営まれていた下総国分寺や下総国分尼寺との関りを想起させる。

国分川は須和田付近で真間川に合流するが、この2つの川に画された国府台・須和田台・国分台一帯が古代下総国の国府域と捉えられるため、北下遺跡は国府域の東限であったと考えられている。

#### (4) 須和田遺跡

須和田遺跡は国府台遺跡の台地から東に細長く延びる支台、長さ600mほどの須和田台地のほぼ中央に位置する。縄文時代前期の小貝塚がわずかにみられるほかは、弥生時代中期から平安時代までの遺構や遺物が見られる複合の集落遺跡である。特に、南関東地方で最初に出現した弥生式土器が須和田台地から出土し、須和田式土器という型式名で呼ばれるようになり、また奈良・平安時代に比定される真間式土器や、国分式土器の標式遺跡としても知られている。

6世紀代と8世紀後葉～10世紀代に遺構や遺物が増加するため、国府台古墳群の形成や葛飾評家、下総国府、下総国分寺などの設置との関係がうかがえる。須和田遺跡では「右京」墨書土器が、また須和田台地付近の土取りされた箇所から「博士館」墨書土器が出土しており、下総国府を考える上で重要である。

#### (5) 国分遺跡

国分遺跡は、国分台の台地南側で下総国分寺跡と下総国分尼寺跡の寺域以外に広がる遺跡で、下総国分寺が創建された8世紀中葉以降に建物が出現することから、下総国分寺と下総国分尼寺の造営を機に人々が住み始めた場所で、国府域にも含まれていたと考えられている。

これまでの発掘調査により、国分遺跡では8世紀後葉に竪穴建物や掘立柱建物の数が急増し、11世紀頃まで継続して人々が住んでいたことが確認されている。鍛冶工房なども発見されていることから、下総国分寺や下総国分尼寺の造営や修繕などに携わっていたとも推測されている。出土遺物には、下総国分寺の主要建物や北下瓦窯から持ち込んだと考えられる瓦も竪穴建物などから多量に出土し、さらに緑釉陶器や鉄鉢形土器、香炉など、仏教に関ると考えられる遺物が数多く出土していることから、下総国分寺や下総国分尼寺と密接した遺跡であることをうかがうことができる。